

# 条件不利地域普通科校の高卒後の移動と地元定着

## — 青森県下北郡北通の同窓会調査から

白石壯一郎・羽瀨 一代

### 1. 問題の所在

#### 1-1. 就職・進学・Uターン— 個人の移動の軌跡と背景

本稿の目的は、条件不利地にある普通科高校の卒業生の進路と地域間移動のパターンについて議論するための枠組みを、青森県下北半島北通で得た質的データを事例に提起することである。ここでは、条件不利地域出身の若者の移動が、彼らの人生においてどのような契機で生じ、そして、それが事後的にどう主観的な意味づけがなされているのかということが、データの分析と解釈によって明らかにされるはずである。

周知のごとく、戦後の日本が復興を経て高度成長に至る過程で、中高卒の多くの少年・若者が地方から都市へと流出した（向都離村）。就職に伴う高卒就職者の県外流出率は1970年代まで3割前後であり、その後ゆるやかに減少している [林 2002]。また、その後の低成長期に入って移動のパターンは多様化・複雑化し、いわゆるUターンやJターン、Iターンなどと呼ばれるパターンが出現した。1980年代から90年代にかけては、日本の人口移動が大きな変化を見せた時期である [清水 2001]。向都離村が人口移動の主要パターンであった時代は、就職や進学、プッシュ&プルで一元的に移動の背景を説明することが可能な時期でもあった。しかし、その後のパターンの多様化・複雑化とともに、移動の背景にある決定要因もなにかひとつ（進学・就職による階層移動）に集約して説明することが難しくなった。たとえば、男子の「職業」を理由とした移動率は1980年代後半と比較して90年代に増加しているが、「入学・進学」を理由とした移動率は、1980年代後半と比較して90年代に減少している [清水 2001]。そして、大学進学者に限ってみれば、彼らの県外流出率は、1970年代以降一定である<sup>1</sup> [林 2002]。

以上が戦後の地方からの／への人口移動についての従来の議論の概略だが、多様化・複雑化して以降の移動パターンの背景にある諸要因をさぐることは、いまだ課題として残されている。就職、

---

<sup>1</sup> 第二次ベビーブームの世代で人口の増大がみられたことから、移動率が一定であっても、1990年代の進学による移動者自体の数が増大したため、1990年代は、首都圏に一定数の移動者がいたと理解できる。現在では、18歳人口の減少により、それぞれのコミュニティレベルにおいて、流出率は一定であるものの、地元に着する絶対数が極端に小さい値となってしまうことに実感レベルでの人口問題への危機感が高まっているという側面がある。

進学、転職、結婚などさまざまな人生の転機と移動の契機はどのように関わっているのか。おそらく問題はそれだけにはとどまらない。一般的に言われるそのような「転機」などとはあまり関わりなく個人が移動を決定することもある。例えば先行世代の軌跡を参照して移動が決定されたり、個人がその周囲に強く促されて移動をする、あるいはとどまることも予想できる。つまり、ある人の地域間移動については、構造規定的な捉え方だけでも、個人の合理的決定論だけでも説明力を持たない。また、「移動すること」が個人の選択であることは疑いようがないが、「移動しないこと」つまり「地元定着」も、流出先に「いつまで住む／働くか」も、消極的であれ積極的であれ意識して選択されたものである。したがって個々人が意味を見いだせるものとなっているはずだ。これが、移動について質的データを材料に議論しようとしたことの原因である。

## 1-2. 質的データから移動をみる—先行研究

近代以降の社会では社会が急速に変化し、生活世界が多様化することによって、これまでにはないような新しい社会の文脈や視野があらわれる。この社会的状況を諸個人がいかなる場でのように経験するかが重要な主題のひとつとなるが、これは演繹的方法では十分な理解は得られない〔フリック 2002〕。

移動パターンについて質的データを材料に議論するような研究業績は、まだ多くない。ここで質的データとは、インタビューによって得られた回顧的な語り、いわゆるライフヒストリー（あるいはライフストーリー）において、各個人の移動のタイミングやその背景にあった事情、およびかれら自身がその移動についての考えとを述べた内容を指す。移動についての社会学的研究は、階層間移動（社会移動）を主題とするものが多くあり、SSMなどの質問票による大規模調査がおこなわれている。地域間移動についても、これに習って質問票調査とそれによって得た回答を統計的に処理して議論するものが多くみられる。

そのようななかで、吉川〔2001〕や山口〔2012〕は、質的データにより高卒後の若者の進路（地域間移動）を扱った近年の例外的な存在といえる。

吉川〔2001〕は、鳥根県にある公立高校の国公立大学進学クラス出身者 35 人を対象に本人（18 歳時点）と父母への質問票調査をおこない、のちに本人（24 歳時点）へのインタビュー調査をおこなった結果を総合して地域間移動と学歴・キャリア形成を考察した。この研究で吉川は、高校卒業後の進路と地域間移動についてのパターンを 4 類型（都市定住型、J ターン型、県内周流型、U ターン型）に整理し、現代日本の地方県、なかでもとくに高等教育機関が通学圏内に存在しない地域の「ローカル・トラック」を見いだした。このローカル・トラックとは、アカデミック・トラックを補完する別次元の水路づけであるという〔同書 pp.219-227〕。学校教育による進路の方向付けは学歴による進路選別として機能する。これとは別に、地域の高校生の進路には水路づけられたかのようなパターンがあった。吉川が事例から導きだしたローカル・トラックとは、県内周流型、つまり「鳥根県内郡部の高校で「嫡出」エリートとして育てられ、県内のエリート職にまっすぐ向か

う筋道の高等教育を県内で受け、実際に県内職を移動していく人材になるという経路」を本流とするものであった。

この知見は、県外流出型をみていくときにも、大学進学先として農学部、教育学部などのように県内にもどって職を得ることが容易な学部を選好する傾向があること、またUターン型の都市在住期間を「県内に戻って就職する（できる）ための猶予（モラトリアム）期間」と捉えられることなど、説明力がある〔同書pp.218-219〕。しかし、そうしたトラック・パターンの説明の代償としてライフヒストリーのインタビューによって得られた、決定にまつわる周辺状況や本人の懐古的意味付けの整理と分析とが置き去りにになっている感が否めない。また、地方の普通科高校のうちでも国公立大学進学クラスを対象を絞っているゆえ、統計的に無視できない多数である高卒就職組の移動については言及されないままである<sup>2</sup>。

山口〔2012〕は、大都市部に移動した青森県の工業高校卒業生である18歳から33歳の男性7名について、インタビュー調査によって得られたデータをもとに事例解釈をおこなうが、ここでは地域間移動の決定時にはたらいだ周辺状況が積極的に扱われている。青森県は雇用環境や県内高等教育進学についての条件の厳しさ、そして工業高校卒業生の場合、大卒者に比べて所有資源が乏しく、親子ともどもよりよい就職をすることに価値を置き、高校の熱心な進路斡旋で正規雇用の初職を得ている。大都市での生活のスタートアップには、社員寮というインフラを利用すればよい。しかし、初職にかれらがとどまり続けることができるかどうかは、厳しい雇用状況のなか不透明であり、実際に地元就職のあてのないままUターンするケースも多くある。

こうした状況がかれらの意識のどこかにあるはずの「ローカル・トラック」の外堀を形成しているとすれば、かれらの工業高校進学という選択（「就職に有利」）や、大都市への就職という選択（両親は県内就職希望だったが、最終的には「就職できれば」、「親元から離れたかった」「青森県じゃ物足りない」）、そして大都市生活・就業にともなう日常（初めての一人暮らし、「同期は大事」「最初は仕事や飲み会が大変、二年目は責任が重くなり」）はどのように経験されたか、あるいはローカル・トラックの意識化ということが（あまり明示されてはいないが）この調査の中心的な問題であろう。これは本稿の論点の参考にもなるが、残念ながら調査対象者がまだ比較的若いという事情から、長い場合で高卒後15年間程度のストーリーを追うにとどまっている。後に述べるように、本稿では対象者をひとまず現在50歳前後の卒業生に絞って、卒業後30年間程度のストーリーを追うことにした。

### 1-3. 条件不利地域の普通科高校というフィールド

ここでは、調査の対象となった「条件不利地域の普通科高校」について、その調査対象としての特徴や意味を記しておく。

<sup>2</sup> おそらく、移動が県内に限られるパターンがほとんどで、全国的ローカル・トラックの展開に乏しいと予測されたためだろう。

ここ数年来、人口減少が地域の将来を深刻に規定することが喧伝されている。ある地域の人口減少は自然減と社会減によって構成され、社会減は人口移動による流出である。この社会減（や社会増）について実態に基づく評価がまだ定まらないままに、地域コミュニティの空洞化（や「消滅」）と言われる。こうした地域を指す行政用語として「条件不利地域」「条件不利地」といった語が近年の行政文書に散見される<sup>3</sup>。いずれも中山間地や離島、島嶼部など地理的に都市部から一定程度以上距離があり、雇用機会も少なく、産業振興をはじめとした社会経済的な発展がのぞみにくい地域を指している。本調査が対象とする下北半島北通地区も、こうした条件不利地域にあたる<sup>4</sup>。

普通科高校は通常、卒業生が大学や専門学校等へ進学することが想定されている。しかし条件不利地域にある普通科高校は、(1) まず絶対数が少なく、比較的広域から生徒を集めて成り立っている。また、(2) 生徒の進路は進学先、就職先ともにバラエティがある、という特徴がある。このような条件のもとにある高校には、必然的に多様な人材が生徒として集まる。同一通学圏内に複数の普通科高校が存在する都市部（進学有利地）の高校ではいわゆる「偏差値」で輪切り状態になっているゆえに、人材と進路の多様性に乏しく、9割以上が大学や専門学校に進学ということも珍しくないだろう。

調査対象としたのは、下北半島の「北通」地域にある県立大間高校（普通科）卒業生である。同地域において自宅から通学が可能な範囲の普通科高校は1校しかなく、ほかに選択肢がない。

条件不利地域の普通科高校卒業生がたどる経路は、進学より就職が多く、四年制大学進学より定時制や短大・専修学校進学が多くを占めることとなる。進学・就職ともに進路指導部の紹介や情報提供が強く影響して生徒たちの卒業後のローカル・トラックを形成する。また、大学進学には経済的な負担が前提されるために、現実的な進路選択のなかでは必ずしも大学進学が第一とならず、就職、とくに県内や地元の公務員一般職が人気となる。

このように、条件不利地域の普通科高校の卒業生の進路については、大学進学一辺倒ではないという意味では多様性があるが、一般的に周囲からの方向付けによってローカル・トラックができていく場合が多いと言えよう。

<sup>3</sup> 総務省の定義によれば、条件不利地域とは、「過疎地域自立促進特別措置法 [みなし過疎、一部過疎を含む]」、「山村振興法」、「離島振興法」、「半島振興法」、「奄美群島振興開発特別措置法」、「小笠原諸島振興開発特別措置法」、「沖縄振興特別措置法」のいずれかの対象地域・指定地域を有する市町村である。

<sup>4</sup> 多くの移動に関する量的調査では、都道府県単位を母集団として県内/県外という軸で移動を理解している。しかし、この地域区分では、条件不利地域に特定した移動に関わる問題を把握することはできない。

## 2. 調査地と方法

### 2-1. 青森県下北郡北通

ここでは、調査地である青森県下北郡北通の社会的概況について記しておく。下北半島の北西側には海に沿って20ほどの集落が点在している。東端は大畑町正津川から、下北半島北端の大間崎を回って佐井村牛滝を西端とするこの地域は、通称「北通（きたどおり）」と呼ばれている〔竹内編 1968〕。本稿で対象とする大間高校の主たる通学圏である風間浦村、大間町、佐井村の1町2村もこの北通のなかにある。以下では便宜上この1町2村を「北通」と呼ぶ。海岸線の後背は多くがすぐに山林（檜山）となっていて、人びとは長らく地先沿岸漁を中心とした漁業をおもな生業とし、山林を利用してきた。それぞれの町村内には複数の集落があるが、ここで言う集落とは現地の方々に言われる「部落」であり、文献によっては「旧村」のように記載するものもある<sup>5</sup>。おおむね小学校区と対応しており、それぞれ部落会や祭りがあり、人びとが「地元」と意識するのはこの単位である。

2010年国勢調査時点の北通1町2村の人口は約1万1千200人であり、大間町に約6千300人、佐井村に約2千400人、風間浦村2千500人となっていて、その5年前の2005年からの人口増減率はそれぞれ、大間町+2.1%、佐井村-14.8%、風間浦村-5.3%である。産業別就業者人口割合は、第1次産業が各町村16～21%、第2次が29～33%、第3次が約43%であり、この第1次産業はほぼ漁業である。漁浦すなわち「部落」（集落）単位に結成された漁業組合が漁業権を統括しており、風間浦村には3（下風呂、易国間、蛇浦）、大間町には2（奥戸、大間）、佐井村には1（佐井）の漁業協同組合の事業所があり、このほかの多くの集落にも支所や出張所、集荷所がある。ただし専業の漁家は一部であり、出稼ぎなどを組み合わせた兼業が多くを占める。第2次産業の主力は建設業であり、食品加工・木材加工などの製造業がこれにつぐ。第3次産業は卸売り・小売り業、宿泊・飲食サービス業、医療・福祉業などが主である。15歳未満人口は、2010年国勢調査時点で、大間町837人、佐井村254人、風間浦村234人の合計1,325人<sup>6</sup>。人口減少によってこの30年間ほどのあいだに、2村の中学校・小学校はそれぞれの村内での統廃合がすすめられた<sup>7</sup>。

### 2-2. 大間高校とローカル・トラック

青森県立大間高等学校は、1974年度に開校した全日制普通科の田名部高校大間分校が昇格する形で1975年に生徒定員225名で開校した<sup>8</sup>。風間浦村、大間町、佐井村の1980～84年度平均高校進学率はそれぞれ82%、70.6%、90%となった〔大間町史編纂委員会編 2006〕。1980年代には2年

<sup>5</sup> 北通の村落における在来社会制度については、竹内編〔1968〕、林研三〔2013〕に詳しい。

<sup>6</sup> 人口統計資料はいずれも総務省統計局のwebサイトより得た。

<sup>7</sup> 最近のものでは、風間浦村の3つの集落の小学校（下風呂、易国間、蛇浦）が2015年度で閉校となり、新たに建設された風間浦小学校に統合されることが決まっている。

<sup>8</sup> 全日制分校が開校する前には、大間町には田名部高校大間分校が、風間浦村易国間には同校風間浦分校が定時制で存在した（いずれも1948年開校）。

生、3年生は就職クラス2学級、進学クラス1学級という編成だった<sup>9</sup>。

これによってこの地域の若者たちのローカル・トラックも変化したと考えられる。それまでは、中学校を卒業後は1町2か村の外に出て進学する者、地元の定時制分校に進学する者は少数であり、多くは県外就職する、あるいは地元に残って家業を助けた。地元を出た女子の多くは県外各地の紡績工場へ<sup>10</sup>、男子は遠洋漁船に乗るか東京をはじめ関東圏の非熟練労働に就くといった進路が一般的にみられた。1980年代までは中学卒業後すぐに就職する若者が少数ながらまだいたものの、全日制高校の開校により、子どもにとっても親にとっても「とりあえず高校に行く」という選択が一般化していったのである。

高校卒業後の進路については、就職希望者が県外就職の途を選ぶ者が多いという点では開校前と大きく変わらない。これは北通には第2次、第3次産業ともにほとんど小規模の事業体しかないからである。地元就職希望先として目指されるのは、現在に至るまで地元の地方公務員（町村役場、郵便局、消防）、ついで県内自衛隊や地元団体職員（漁協）などであり、とくに地方公務員については「安定している」という理由から、進学クラスの成績上位者であっても、採用が決まった場合に進学せずに就職するということが珍しくはない<sup>11</sup>。県外就職については、首都圏、中部圏などへ出て非熟練労働や事務一般職に就くといった進路が一般化している。進学クラスであっても、県外就職が選択される場合は少なくない。進学先としては、4年制大学は1980年代にはまだ珍しかった。当時の進学先の多くは短期大学や専修学校、あるいは大学夜間部への進学であった。女子の場合は、高卒後に紡績会社や派遣会社などに就職し、社員寮付きの「通学社員」となって夜間短大などに通う、という途も取られた。1960年代までの「中卒から県外就職、男子は遠洋漁業か都市部非熟練工、女子は紡績」というトラックは、明らかなメイントラックではなくなったのである。

### 2-3. 調査方法

本調査では、半構造化インタビュー法を用い、エスノグラフィック・インタビューと問題中心インタビューを組み合わせデータを集めた。対象となる大間高校同窓会に対しては、2009年に作道信介とともに調査の趣旨を説明し、大間高校を通じて紹介してもらった。当時、弘前大学人文学部で開講されていた社会調査実習において、青森県下北郡大間町を対象として出稼ぎ経験について学生とともに調査をおこなっていた。2012年には、社会調査実習で大間高校卒業生の進路について、大間高校協力のもと、学生たちとともに調査をおこなった〔社会行動コース社会調査実習2012〕。実習終了後も、大間高校の卒業生の進路調査を継続しておこなってきた。

<sup>9</sup> 2014年時点の生徒数は206名（男子111名、女子95名）であり、2年生、3年生は進学クラス、就職クラスがそれぞれ1学級ずつとなっている。

<sup>10</sup> 繊維産業は1950年代半ばから60年代半ばにかけて、職安と学校の紹介により、地方中卒女子の地域間移動・雇用労働化に決定的な役割を果たした〔石田・村尾2000〕。

<sup>11</sup> のちの事例でみるとおり、役場の採否が決まる時期が大学受験の前であるという点も、大学受験をせずに役場に就職するというパターンを多くしている要因と考えられる。

本研究に使用しているデータの収集を本格的に開始したのは、2014年以降である。大間高校同窓会は、毎年7月頃に大間町で総会が、東京で関東支部会がおこなわれる。これらの会合に出席することで、エスノグラフィック・インタビューをおこなった。またこれらの年次会合以外にも、大間高校昇格40周年記念式典後の会合、同窓生たちがボランティアに別会合を持っている場合にはそれらに出席し、同様のインタビューをおこなった。また、あらためて面会に応じてくれた個別の同窓会メンバーに対しては、集中的に問題中心インタビューをおこなっている。したがって、本論で使用するデータは、この二つの種類のデータが混在している。

大間町で開かれる大間高校同窓会総会には、毎回50名程度の参加があり、20代も10名以上参加している。関東支部会では、15名程度の参加があり、20代も1、2名程度、参加している。この総会で配布される総会資料によれば、大間高校同窓会は1976年から全日制についての同窓会幹事名の記載がある。1975年に、青森県立田名部高等学校大間分校から独立昇格しているため、大間分校入学、大間高校卒業という1976年卒業生が第1期生ということになる。

調査依頼をおこなった時点の同窓会会長が第2期生（1977年卒業）であり、2014年以降の調査時点での同窓会会長が第5期生であるため、1970年代後半から1980年代の卒業生が主たるインフォマントとなった。問題中心インタビューに応じてくれた会員は、現在のところ、21名である。

問題中心インタビューにおいて、質問は、高等学校卒業後の進路と移動／定着の決定とその要因を中心におこなった。本稿では、インフォマントを仮名で表記している。

### 3. 移動の契機と背景—移動パターンと決定要因の解釈

#### 3-1. 地域間移動の契機 (opportunity) と考慮事項 (issue)

3章では、北通出身方々へのインタビューから得た事例の解釈をすすめていく。3-2節と3-3節では現住地が北通の方々、つまり「地元定着」および「Uターン」型の移動パターンの方々を対象としており、3-4節では首都圏在住の方々を対象としている。これらの方々へのインタビューから得たデータをもとに、「地元定着」および「Uターン」の移動パターンの背景にある決定要因とその複合性について考えていく。なお、ここで言う「地元」とは北通1町2か村内の各集落（「部落」「旧村」）のことを指す。現在のかれらにとって、地元に住居して暮らすこと、地元から出て行くということ、県外で暮らすこと、地元に戻って暮らすことは、それぞれどのような意味をもつのか。これらが、各インフォマントの事例を通して理解されるべきことがらである。

そこでこの3-1節では、次節以降で事例を列挙して行く前に、ポイントと思われることをあらかじめ述べておこう。常識的には、ライフコース<sup>12</sup>のなかでの移動の背景にある典型的な契機 (opportunity) とは (a) 進学や就職、(b) 転職、(c) 結婚、(d) 親の病気・死などであろう。ライフコース上の

<sup>12</sup> ロウントリーやチャヤノフら経済学者の提起したライフサイクル概念は、もともと地域性や歴史性を欠く概念だとして批判があった。本稿では、調査地の地域社会的特性や高卒時が1980年代だった対象者らの歴史的な位置をふまえた生活史を類型化したものを（地域）ライフコースとした。

イベントはさまざまであれ、移動に関してはこれらが定番のものかと考える。

ところで、移動のパターンや移動先は上記の「契機」だけによっては決まらない。契機とは別に、決定・選択を基礎づける「考慮事項 (issue)」とでもいうべきものがある。自分や配偶者の就職・転職機会、消費生活についての環境や行政サービスへのアクセス、子育て環境、親との関係(親の加齢)などがそれにあたる。考慮事項は、つねに各自の念頭にあって(あるいはことあるごとに念頭に浮上する)、移動についての判断を左右する。移動は生活者各自の人生設計と密接に関わるイベントであり、当事者は決して「ある時点」で瞬間的に決断を下すわけではなく、考慮事項が常に・既に潜在的な移動要因としてあり、契機がやってくるとローカル・トラックを参照した移動が実現されるということなのである。

このことを考えたうえで、北通のような条件不利地域出身者の「高卒時から50歳台にいたるまで」の地域ライフコースの中での移動パターン形成を、考慮事項 (issues) と契機 (opportunities) の組み合わせとして展開してみよう。

条件不利地域にとって、人が移動の契機に直面したとき決定を基礎づけ、方向づける考慮事項とはどのようなものがあるだろうか。考慮事項は、中長期的な、しばしば世代間にわたる視野をもとにした内容で構成された複合的な問題群であり、ひとつひとつを切り分けることは難しい。

高卒時の進学・就職という契機についての考慮事項について考えると、この時点で考慮事項となる第1のものは「家に残るのかどうか」であって、これは本人のみならず親や周辺の近親者が気にかける。これにはもちろん(残るとした場合の)「地元の就職機会」「地元の生活環境」であり、次に、「都市的な消費生活などの環境」「経済(金銭)的負担の問題」「より条件のよい就職機会」などは都市に他出するという決定を左右するし、親族や高校の先輩など知り合いのネットワークの有無も関係する。結婚の相手と時期については都市部にいたほうが選択幅が広くなり、周縁地域にいると狭まってしまうと言われる。以下、簡単に整理してみよう。

(a) 条件不利地域にあっては、まず高校進学時に通学圏内の学校数が少なく(調査地の場合は現実的に1校のみ)、通学圏外の進学校に越境通学するさいの経済負担に堪えうる少数のみが大学進学達成に有利な途を選ぶことができる。結果として、条件不利地域内の普通科高からは、進学より就職が、進学先としては四年制大学進学より定時制や短大・専修学校が多くを占めることとなる。かくして第一次産業以外の産業が発達していない北通のような条件不利地域の普通科高の卒業生は、都市部(おもに関東)に他出する。他出した場合の就職先、あるいはそこからの転職先の大多数は、非熟練労働や事務一般職であり、いわゆるホワイトカラー上級職に至る例はほほない。要するに、都市部に移動すればそれなりの就職機会は開けるが、条件のよい就職先があるわけではない。他方、漁村である地元には実家に漁業権さえあれば「漁」という第2選択肢がつねに控えている。こうした条件が、都市部への移動と地元へのUターンを方向付けていると考えられる。

(b) 都市部に移動すれば結婚相手の選択に幅ができるか、という点は確かめようがないのでひとまず置いておく。この論文にとって重要なのは、かれらのあいだでの世間知として、他所からヨ

メをとれば地元に戻って一緒に暮らすのが難しい、ということが共有されている点だ（女性の結婚相手についても妥当する）。これをふまえれば、結婚相手の選択の際に、北通（あるいは青森県内）出身者を選ぶか、他出就職（進学）先の関東圏出身者を選ぶかという選択が、事実上は将来的に地元に戻らす可能性を残すか、捨てるか（あるいはその可能性担保のために多大なコストを支払うか）という選択になっていることを意味する。つまり、結婚相手選択の幅の拡大とはまったく別の選択も同時にすることになっているのである。

(c) 子育て環境については、どうか。ここにも相反拮抗する要因が考えられる。つまり田舎のゆったりした雰囲気のがびのがびと子どもを育てるのがよいという見方と、大学進学をゴールとして子どもの教育を考える親にとって、条件不利地は忌避したい環境だという見方と。だが、今回までの調査ではこの点についての資料は得ることがほぼできていないので、この点についてここで論ずることはできない。

(d) 年老いた親の介護については、進学・就職にともなう地元からの人口他出が増え、たとえば「長男は家に残る」「（長男に限らず）誰かが家に残る」というような規範的な前提が崩れ始めると前景化する。また、人口のほとんどが持ち家暮らしで貸間住まいではない北通の現状からすれば、子ども全員が出て行き誰も残らないことは、そこに親を放っておくこと、さらに将来的には空き家にするということを意味するだろう。「長男家督相続の非デフォルト」状態があったとすれば、そのとき浮上するのは「誰が家に居るか（残るか）・帰るかをめぐるキョウダイ間の長期交渉」だということが考えられる。

さて、以上をみればわかるように、(a)～(d)の移動の決定要因・誘因は互いに独立しているのではなく部分的連鎖関係にある。以下ではこれらの諸点に留意しつつ、各事例をみていくこととしたい。

### 3-2. 地元定着一仕事と漁と

ここでは、大間高校卒業後に北通から他出せず、ずっと「地元」にとどまっている方々5人の事例（【事例1】～【事例5】）の解釈をおこなう。各事例文中の〔 〕内は、インタビュー時の状況などを書き入れている。

#### 3-2-1. 地元企業就職から漁師へ

根津太郎さんは、1978年度卒業後に地元の燃料会社の電器部門に就職。その後35年間ほど同じ会社に勤めたあと、最近退職して専業漁師になった。これまで北通を出て暮らしたことはない。長男で父親は漁師。漁は、小学生の頃からやっていたと言う。

#### 【事例1】 漁との二足草鞋でやってきた

〔その日の朝採った昆布を、根津さんと奥さん、根津さんのお母さん、それに近所のテツダイの

70歳台の男性の4人で干す作業を終え、すでに別の日に干しあがって取り入れた昆布を選別したり、ヒレ取りしたりしている作業場で話を伺った。]

高校に進学したのは、京都への修学旅行に行きたかったから。下北からはなかなか行けない。当時は新幹線もなく、夜行列車で向かう。それが楽しみだった。中学校の修学旅行は東京に夜行で行った。朝の7時に上野に着いた。

「会社勤め」した燃料会社に就職したのは、高校に募集が出ていたからではなかったかと思う。同じ会社に同級生が2人就職した（男子1、女子1）。小さな会社なので、そこで店での販売も、クーラー取り付け等の営業もすべてやった。1980年あたりは、ちょうど景気が上向いて、アブラ業界がもうけたはずだ。いっしょに就職した同級生2人はその後、女子は結婚退職し、男子は10年くらい勤めたあとに東京の方に出て就職すると言いつつ退職した。かれの兄2人も東京で働いていた。

自分も東京に出ることを考えないでもなかったが、特に卒業後2-3年はウニ漁が大漁で、値もよかった。朝の1時間半で、いいときは会社の給料（約7万円）の倍稼げた。先輩も大勢、地元に残っている人がいた。東京に出た先輩が帰省したときに、声がかかることもあったが、会社も勤めて3、4年と経てば、かんたんに辞められるものではない。自分は外に出るのは、長くて2泊3日、通常1泊2日の会社の旅行くらいだった。[白石「長男だから、出て行きにくい、ということでは」]  
「まあそんなこともないけどもどうにもこうにも、ここに母親がいるシテあんまり言えねエもんで（笑）。」  
[根津さんのすぐ隣でお母さんも作業中で笑っている。]

電器部門で働いたあと、スタンド部門の総務に異動してさらに10年くらい働いた。事務仕事は好きじゃなかったが、仕事なのでしかたないと割り切った。その後、1年半前に退職していまは漁をやっている。秋は昆布やウニ、冬はアワビなど。漁業権は、亡くなった父親のものを譲り受けた。昔に比べて燃料の値は高騰しているのにウニも昆布も値が下がった。昆布は以前より質が下がったと言われるが、そうは思わない。これでは漁をやる若い人も減る。いま漁協も厳しくなって、昔と違って登録していなければ沖にも出られないし（ふのりなど）拾うこともできない。

学校も厳しくなった。自分は、父親と小学生の頃から昆布採りなどやった。手伝いといえば手伝い。「そういうなかで、（漁の）仕事を覚えていった、というかの」「だから学校も遅刻して行ったさ、父親の『手伝い』して稼ぎながら、学校にも行ける」。だが、中学校のとき、アワビ漁のころの期末テストを学年男子10人中8人が欠席し、テストが中止になった。このとき教師が怒り、各家庭にも学校から通達が行った。下の学年には、「ナド（お前ら）のせいでおれたちが（漁に）いけなくなった」と言われたものだ。

成人した自分の息子たちは、漁のことは分からない。もしかれらが漁をやりたいと言ったら「やれるもんだらやってみろ」と言う。結局、やってみなければ分からない。だけども漁師1本でやれるわけではないのは、やっている者は誰も知っている。いまこの部落で20歳台で漁師をやっている人はいない。勤めながら朝やってるといふ20歳台もいない。30歳台も、いても1人とか。40歳台になったらようやく何人か出てくるていど。息子たちも60歳、70歳になったら退職しているだ

ろう。そのときここにいればもしかしたら見よう見まねで漁を始めるかもしれない。このあたりは磯周りを小さい船で行くから、危険をとまなう漁というのではないから。

「東京に出ることを考えなくてもなかった」と根津さんは言うが、地元に着した。かれには長男だから残らねばなるまい、という考慮事項ははたらいていたかもしれないが、同時に地元企業に就職先が見つかったということ、漁ができてしかも高校卒業当時は豊漁だったことも定着への誘因となっただろう。実際、根津さんは長く勤めと漁との二足の草鞋を履き続けてきた。

漁については、「稼ぎがいいときにはとてもいいが、豊漁は長く続かず、現在は漁1本でやっていくことは厳しい」と現実的な態度をとっており、これは北通のこの世代の男性には共通している。つまり、現在に至って漁は地元定着やUターンの契機・誘因たりえないのだ。若い頃に好況を経験した根津さんだが、こうした浮き沈みがあるということを知っていればこそ、地元企業に35年間も勤めていたとも言えるだろう。しかし一方で、収入の極大化を目指さない限り、地元での日々の糊口を凌ぐという面では漁が昔から変わらぬ生業だと見ていることも窺える。こうした感覚が共有できているのはかれらの世代までであって、かれらの子ども世代は小さい頃から漁に出ていたわけではない。しかし漁をしなかった子どもたちも年を取って（Uターンして）地元に住めば、「見よう見まね」で漁をやって暮らしていけるかもしれない、という見解が述べられている。生業としての漁がある限り、地元では最低限の暮らしはできる（だが、それしかない）、という安心感と不安全感とは、北通のりびとの地元意識の通奏低音となっている。

### 3-2-2. 漁業を廃業して漁協

富田隆三さんは、1979年度高校卒業後に地元の漁協で働きだし、最初はアルバイト、その後正規採用となって現在に至る。「どこさも出たことねえ」。ひとりっ子で、父親は漁師だったが彼が小さい頃に病気で倒れた。

#### 【事例2】ほんとうは出たかった

[漁協の事務所内の富田さんの職場で。ときどき、同僚の方が事務所に入出入りする。この方々には学部生の実習などでお世話になっており、祭の話やもう卒業した学部生の話など、直接関係のないさまざまなおしゃべりも交えながらインタビューがすすんだ。]

ほんとうは自衛隊に入りたかったが、小学校に入る前の年に漁師だった父親が病気で倒れていたし、一人っ子だったので地元に残った。とにかく勉強はきらいだったが、高校に行ったのは、親が高校くらい出しておけとうるさかったのと、中学校で陸上をやっている、高校に（推薦で）引っ張られたからだ。陸上は高飛びと三段跳びで、高校のとき東北大会まで行き、一般になってからは全国まで行った。高校を出るときに、同級生は女子何人かと男子も若干名しか地元に残らなかった。役場の試験も受けたのだがダメで、漁協に。

勤め始めて加工所に20年近くいた。その後急な配置換えで現在の営業課へ。漁協は、外からみれば地域では安泰の職種かと思われるかもしれない。入った頃は景気がよく人もいっぱいいて、忙しいときは夜通し近く働いて稼げた時期もあったが、いまはダメ。年々不景気になり、水揚げも減り、値も悪く、温暖化の影響で漁期も微妙にズレている。役場はつぶれないし安泰で、「うち（漁協）からみればもう、天下」。いまでも漁協に来る若い人は地元に残ろうとしている人だが、（漁協の現状では）可哀想だと思う。

それでも自分が転職など（移動）を考えなかったのは、親がいるから面倒をみるということと、25-26歳で結婚するとき、借金をして地元の家を建てたからだ。最近その借金を完済したものの、「やっと借金終わって、と思ったらこんどまた（補修費）かかるしなあ…うまく解決せねじゃ」。

漁業権は、父親が亡くなったあとに手放した。そのまま引き継げば毎年3万、5万かかって収支金だとか賦課金だとかがかかる。漁協にいれば、漁師の人から魚、農家の人から野菜などをもらえることも多く、食べるのに困らない。「買うって言えば肉くらいのもんでさ（笑）」。

就職後も、地元を出て行きたいと思ったことは何度もあった。でもそれは一時的なもので、いまとなればもうあと何年もない。とにかく、休みがあるところに行きたいと思っていた。いまの仕事は休めないで、「子どもが可哀想だのさ」。土日や休日休みのところ、連休に休めるところに行きたいと思ったことはある。友達から紹介してもらってそうした職に就くのもできなくなかったが。

北通の人びとの誰もの考慮事項のひとつに、親との関係がある。一般的には親の加齢や病気にとまなう介護、そして親の死などが移動の契機になるが、ここで問題とされるのは、人びとが「親のメンドウみる」と表現する、「年老いた親といっしょに居て支えること」を言う。なので、これは上記の「契機（opportunity）」とはあるていど独立した考慮事項（issue）なのである。富田さんの場合、父親がかれの小さな頃に病気で倒れてしまった。また、かれは一人っ子だった。考慮事項とこうした状況から、かれは地元の女性と結婚すると同時に家を建てることで、自ら地元定着の契機を作っている。

また、漁業権をきっぱり破棄してしまっている（この先、漁を生業とするつもりはない）点、本当は外に出たかったと述懐している点が【事例1】の根津さんとは対照的である。地元を出て行くにしても、東京などで働いている友人や先輩からの誘い・紹介に応じれば地元を出て就職できるという認識は、根津さんと変わらない。つまり2人とも、「出て行けたが、自分は出て行かなかったのだ」という意識をもっているのである。つまり、契機は自分で作ろうと思えば作れるのだが、考慮事項をもとにかれらは踏みとどまったのだ。

地元で建てた家、築いた家族とともに居るゆえに、富田さんにとって休みが思うようにとれない状況はとてつらい。公務員と並んで漁協のような団体職員は地元雇用の王道とみられるなかで、苦境にあることを漏らす富田さんだが、最近高校を卒業した息子さんが役場に受かって勤めていることを嬉しそうに話していた。

### 3-2-3. 公務員になる

村役場・町役場の公務員、それに消防署（分署）員は、地元雇用でもっとも人気がある就職先である。一方で北通の生業である漁業がしばしば「不安定」と評されるのに対し、公務員は安定・安泰と評される。また、北通のような条件不利地においては、大学に進学する学費の経済的負担や移住リスク（下宿代や生活費の経済的負担、見知らぬ土地での生活ストレスなど）よりも地元での安定を選ぶ例も多く、「(高校で) 頭よければ、公務員」とも言われる。

#### ①休みになれば昆布採れる

本木政史さんは兄2人、姉1人のいる三男で、父親は漁師だった。1979年度高校卒業とともに村の役場勤めに。同級生で、同じ部落出身で役場に勤めた者がもう1人いる。同じ歳で役場に入ったのは消防含めて5人いた。

#### 【事例3】親に役場をすすめられ

〔本木さんの職場である役場内でインタビューをおこなった。周りで同僚の方々に内容が聞こえてしまわないよう、仕切られた談話スペースで。〕

小さい頃から漁をしていた。小学生のころから、父親と一緒に船に乗った。とくに学校が休暇中や昆布漁の時は休みもなく手伝った。遊びたくても遊べない大変さがあった。自分は学期が始まったら学校に行ったが、なかには学校に行かないで漁に行く子もけっこういた。そういう子は、父親に引っ張られてではなく「海が好きでたぶん行ってると思うので、(高校には行かず) 今も漁師やっています」。

高校在学中は「都会に憧れたりして…行きたいなとも思ったんですけどね」。兄2人も姉も地元を出た。村役場は「親が入ったところで、受けろったところで」。役場で働くのもよい。「休みになれば、昆布採れるとかね」。

#### ②役場に行っていなければ進学していた

新潟聡さんは本木さんの同級（1979年度高校卒業）のひとりで、本木さんと同じく兄2人、姉1人のいる三男。長兄は大間高校開校前に外の高校に進学した。そのころはアワビ・昆布漁がまだうまくいっていて、収入があった。その後長兄は東京の私立大学に進学、現在も東京在住。次兄は現在青森市で公務員となり、転勤族。姉は、むつ市の高校を卒業したあと、東京で働いた。

#### 【事例4】親にあまり負担かけるな

〔本木さん同様に、新潟さんの職場である役場内でインタビューをおこなった。〕

中学、高校とアワビ・昆布漁の手伝いを午前中やって授業は休み（昆布の場合は遅くとも午前8時には海を上がるが、アワビは午前中をまるまる休まないといけない）、午後に学校に行く感じ

だった。先生はそうした事情を分かっている、出席日数が危ないと教えてくれた。

大学受験の準備は一応していた。姉のそばの東京の大学に行こうかなと思っていた。姉は、東京に来るなら面倒みる、と言ってくれていた。ところが、役場の結果が11月に分かったので、役場に行くことにした。このとき役場に行っていなければ、進学していただろう。「親も歳を取っている、あまり無理をかけるな」とマゴバアサン（祖母）にも言われた。いまから思えば、大学に行くよりして、地元を出ておいた方がよかったかなとも思う。

当時の大間高校の進路指導は（成績の）上から何番目までは大学に入れるように集中指導するというような体勢だった。同級生のなかでは、女子も進学していた。同級生の男子12人のなかで4年制大学進学者はいなかったが、国鉄、警察、自衛隊、消防署ふくめ地元を出て公務員になる者は多かった。

漁業権は母が持っている。母が活着しているうちはそのままだが、亡くなったときには自分が権利を引き継ぐ。漁をやる人が減ってきているので、ふのりや海藻類も、そう遠くない日に採り尽くせない日が来るのではないかと思う。アワビなどは水揚げと値段ともによくなってるし、昆布も一時期は採れなくなっていたが、少しよくなっている。

新潟さん自身も漁は好きで「アワビ突きに行く」。最近ではウニの値がよくなっている、土日で風であれば獲りに行く。漁は無心になってやれるので楽しい。人と競争にはならぬように場所を選んでやる。それが正業ではないので、楽しんでやれるのだと思う。【事例1】の根津さんは、新潟さんの漁は決して趣味の遊びではなく、プロ級だと笑って話していた。]

子どもの手伝いとして、採ってきた昆布を砂利の上に干す作業はやる（やらせる）。息子もイカ釣り、魚釣りくらいはやるが、アワビ、ウニ、昆布は採れない。船を子どもたちに継ぐということはないだろう。自分は停年後には海のことをやる。漁師ならば60歳でもやれる。役場の職員も停年後に漁業をやる者はいる。

同じ地元出身で小学校から高校までの同級生である本木さんと新潟さんの2人には、共通点が複数ある。まず、ふたりとも子どもの頃から昆布・アワビなどの漁の手伝いをしていた。次に、本木さんは「都会に憧れて」地元を出ることを考え、新潟さんは大学受験の準備をして兄や姉のいる東京の大学に進学しようかと思っていた。さらに、ふたりとも三男であるが、近親者に勧められて役所を受験し、採用されている。

役所に入るということは、地元に着定するというにほぼ等しい、決定的な地元着定の契機（就職）である。また、周囲からの働きかけは、地元着定を方向付ける大きな要素である。もちろん役場の採用試験の結果が分かるのが11月と、大学入試より早い時期であることも、その後の経路を左右する契機にはなる。しかしそれ以前に、上のキョウダイが地元を出て行っているという状況から、三男であるふたりにも、「家を継ぐこと」は考慮事項として浮上していたことは間違いのない。この点を考えれば、ふたりの地元着定はなんの不思議もないのである。

このようなふたりが、そろって漁を現在の生活の副業的なものとして位置づけたり、正業である役場勤めを停年になっても、続けていける将来の生業として想定している点は興味深い。北通の人にとって地元企業に勤めたり役場で働いたりすることは、漁業権を手放さない限り（【事例2】）父親の生業であった漁業から完全に離れるということではない。

### ③子どもの頃から公務員志望

小池亮さんは1988年に高校を卒業し、現在に至るまで役場勤め。弟と妹がひとりずついる長男だ。父親は漁師だったが、早くに亡くなった。地元の公務員になることを子どもの頃から意識しており、小学校高学年時の文集に「将来の夢は役場の人」と書いた。地元でずっと居ることを「普通に暮らせていることのよさ」「なんとなく安心」と言う。

### 【事例5】地元に残る途

[小池さんの勤め先の役場の宿直室で、インタビューをおこなった。白石と同年齢だったこともあって話がはずみ、面談時間は1時間以上に及んだ。]

地元で職を探すとすると、収入が安定しており「資格がなくて入れる職場」という2点で公務員は魅力的。高3のときには、簿記の専門学校に行こうかと考えたこともあった。なにか資格を持って事務的な仕事に入ろうとしていた。きっと進学していれば、また違う途に行っていたのではないかと思う。簿記については、医療事務の会計とかそういう職を想定していた。おそらく進路指導の先生から教わったのだと思う。

高校2年までの数年間、役場の募集はなかった。たぶん5、6年ぶりに職員募集がかかった。「で、高校3年生だったんで、先生とか親から、そういう情報が入って来て」。消防のほうの試験も受けたが、役場は受かって消防は落ちた。母方のオバの夫が消防に勤めており、この人は子どもの頃にかわいがってくれていた。危険物取り扱いの免許を取れ、と言ってくれたこともある。「中学校3年生とか高校さ入ってくれば、長男だろうし、親よりも周りの親のキョウダイたちの方が、いろんな情報を私にこう、入れてきてた…筈です。途をいろいろこう、地元に残るための途を」。

高校を卒業した頃は、みながみな、地元で公務員になろうとしていた時代ではない。関東方面に行って就職すれば事務一般職でも非熟練労働でも、満足な給料がもらえた。20歳代前半の頃は、関東から帰省した友人たちに「かわいそうだなーとかって、言われたときあったもんな。役場の給料(笑)」。

東京の方に出て行こうという気持ちは、それでもまったく起きなかった。おじやおばの話の影響下にあったのかもしれない。自分は長男だし、という意識もあった。「やっぱ父親早く亡くなってるんで…母親一人だし、いずれ自分は残って一緒に暮らすんだなっていうのはふつうに思ってたはず。まあうまく結婚して、同居してますけど」。

弟は高校卒業後にいちど就職して岩手県に出て、2-3年して帰って来た。妹は高校卒業後に関東

地方の夜間の専門学校に「通学社員」で働きながら通い、奨学金の奉公をすませて青森県の病院に戻ってきた。

役所勤めを選んだのは、いまから振り返ってよかったと思う。普通に暮らせていることのよさ、ということかもしれない。生まれ育った場所で大人になっても暮らすのもいいと思う。「生まれたところで、ちっちゃいときから遊んできたところで、今でもまあ、たまに釣りしたりとか」「昔から犬飼ってるんですけど、朝散歩行くとか、地元でこう、ちっちゃいときからやってたことが今でもできてるっていう」「なんだろうな、安心…どっかさこう、遊びに行きたいっていう気持ちは常にあるんですけど」。

小池さんは、自分から積極的に地元に残るために役場就職を選んでるようにみえる。父親を亡くし、長男だからという点が意識され、周囲の友人たちの多くが関東に出て行き稼いでいるのをみても、役所を辞めて出て行こうという気持ちはまったく起きなかったと明言する。その一方、役所に勤めたのは周囲、それも「親よりも、周りの親のキョウダイたち」が自分に地元に残るべく「示してくれた途」だと述懐している。つまり、「長男であること」という考慮事項は、周囲から本人に意識するよう方向付けられている。その結果「まあうまく結婚して、同居」となり、親との関係という考慮事項についてクリアしたのだと言える。

また、小池さんは高校のころ、自分では「なにか資格を持って事務的な仕事に」と思い専門学校への進学を考えたこともあったが、「資格がなくて入れる」役場に就職が決まった。役場に採用される／されないという点が大間高校の3年生にとって重要な移動の契機となることは、すでに【事例2】【事例3】でみた。いま付け加えられるべき点は、その年の役場の募集の有無が、当人たちの与り知らぬところで決定され、この契機への可能性を左右するという点だ。ゆえに、小池さんのように地域外への進学という選択肢はつねに想定されているのである。おなじことから、募集がないか採用されなかったゆえに地元を出た者にとっても、30歳前後までは公務員系の募集・採用がつねにUターンの契機を与えることになると言える（次節以降でその事例をみる）。

### 3-3. Uターンー決定した状況と時期

ここでは、高校卒業後に北通から他出し、その後に「地元」に戻って来た人たち9人の事例（【事例6】～【事例16】）の解釈をおこなう。地元に戻ってくるという決定の契機やその背景にある考慮事項には、どのようなものがあるのだろうか。他出先の関東圏を去る決定についても、北通の地元に戻るとい決定についても、さまざまに契機と考慮事項とが考えられる。

#### 3-3-1. 公務員に受かったので戻って来た

地元に戻る積極的な契機として考えられるのが地元就職である。地元の仕事のあてが出来たので帰る、というパターンである。以下で示す3人の事例は、それぞれ関東地方に就職して他出したあ

と、北通の地元の役場や消防に職を得たので戻って来た、という事例である。

地元の役場に採用される／されない、地元役場でその年に募集がある／ないという点は、高卒時の移動についての決定的な契機となることは、すでに3-2-3.で見たとおりだ。同様に、いずれUターンしようと思って一時的に他出している者にとって、結婚年齢上限の目安であり公務員試験資格の年齢制限目安でもある30歳くらいまでは「地元公務員に採用されて戻る」というシナリオが成立する。

### ①消防に入れたので

インタビューしたなかで2人、Uターンで消防の仕事に就いた方がいた。どちらの方も、消防の試験に受かって戻って来ている。

氷見克己さんは、1984年度に高校を卒業。父親は漁師と兼業の大工をやっていた。一家の長男である。卒業後に関東に出ていくつかの職を経験し、地元に戻って来ている。

### 【事例6】いちど東京に出ておこう

[職場の消防事務所で、氷見さんと、次に登場する杉田さんとにインタビューをおこなった。お二人とも最初は調査ということに警戒があったが、次第にいろいろとお話を聞かせてくださった。]

子どもの頃から中高を通して、昆布採りなど、漁の手伝いはやっていた。高卒後は上京してガソリンスタンドに就職し、神奈川県内で暮らした。その後掃除会社、大工業などを経験し、23歳のときに辞めて戻って来て、それから消防で働いている。自分は長男なので、どこに出てもいつか帰ってくるのだろうという意識はあった。その前にいちど東京に出ておこうと思っていた。じっさいに戻ってくるときには、まだ東京に居たいという気持ちと帰りたいという気持ちと半々。

東京にいるときには、盆の帰省ラッシュを外して9月ごろに新幹線で帰省していた。帰省したとき以外の地元の友だちとのやりとり（手紙、電話など）はとくになかった。

退職後の老後のことはまだ考えていない。「なんだかんだ言って、海行ってももの採ってくればなにやっても死なないていどには食っていける」。

杉田次郎さんは氷見さんより4つ年下で、1988年度に高校を卒業し、青森市のインテリア関係の職業訓練校に行った。それから東京都内に就職、その後地元に戻った。

### 【事例7】ずっと東京にいるイメージはなかった

実家は製材業を営んでいた。高卒後に青森市のインテリア系の職業訓練校に進んだが、その先の進路について教員に県内か県外かの希望をとられ、「どちらでもよかったが、学校の方にも何となくどうだと言われて」県外の希望を出し、東京都内の内装関係の会社に就職した。

その会社に3年間勤めたあと、地元に戻って来た。休日や夜間に作業をすることも多い仕事だっ

たが、とくに辞めたいと思ったことはない。ただ、親からの電話で消防の募集があっていることを知り、応募して受かったので戻って来た。できればいずれ、勤め先の会社の青森支店に転勤で戻ればと思っていたが、ちょっと無理だろうなとも思っていた。会社の給料は、悪くなかった。バブルのピークくらいで、帰って来たときにはバブルは弾けていた。そのままずっと東京にいるというイメージはなかった。[そのころの消防の応募倍率について、氷見さん・杉田さんは「3倍くらいじゃなかったか?」と話している。] 東京にいたころは、盆、正月、ゴールデンウィークあたり、地元の祭りの時季に帰省した。帰って来て地元(部落)の友達、高校の友達と久しぶりに会って呑んだり遊んだりした。家呑みもあったし、むつや大間で呑むこともあった。その会社は長い休みが入ることがあり、「あっちにいても、カネがかかるだけだったので」。

このお2人の話からは、バブル経済期の他出とUターンの気分がよく伝わってくる。当時は東京に出て車を買って地元に戻るのがステイタスだったと2人は言う。氷見さんはマツダのファミリーア、杉田さんはトヨタのクレストを買った。東京や横浜から8-10時間かけて、運転して帰ってくるのだが、「いまから考えれば、よくそんな時間をかけて運転してまで帰ってきたものだと思う」。

長男で、いちど東京に出ておこうと思った、という氷見さん。就職先の東京にずっといるイメージはなかった、と言う杉田さん。ふたりとも「いつかは帰るが一度出よう」と思って他出し、仕事が見つかったということで4-5年で戻って来ている。かれらには当初からUターンのシナリオが念頭にあり、そのシナリオに適う形で契機が「地元就職」つまり消防に採用されたということによって与えられたのである。この場合の考慮事項は、「長男であること」だ。「どこに出て行ってもいつかは帰ってくるだろう」と思っていたと言う。長男(アニ)が家督相続(カマドワタシ)し本家となるのは北通では一般的であり、地元外への他出がない次三男は別家にすると言われる<sup>13</sup>。これがどこまで厳格に適用され、どこまでが柔軟な運用にまかされるのかは個別事情に寄る部分があるのだろうが、こうした制度的規範は親も子も念頭にあるものと思われ、本稿の各事例の随所に登場する「地元の親との関係」という考慮事項の内実を形成している。実家から電話連絡で消防の試験を知らされるなど、近親からの方向付けも働いているという点からもそれは窺い知れるが、詳しくは、以下本節の事例を追っていくなかで議論を加えていこう。

## ②出てから3ヶ月で役場に戻る

沢田健さんは1988年度に高校を卒業。父親は漁師、母親は美容師で、3人兄弟の長男。父はおもに昆布漁をやっており、昆布の時季が終われば出稼ぎに行っていた。関東の警備会社に就職した

<sup>13</sup> たとえば工藤編 [2006→2009] によれば、風間浦村蛇浦では家の相続(カマドワタシ)は長男である「アニ」にするのが原則とされ、長男が本家を継ぎ次三男を別家にする。その場合、財産に関わることから主婦の仕事なども含めた一切のことを長男夫婦に任せる場合と、親が預金通帳の一部を保管し、あとのことは一切を任せる場合とがあるという。[p.482]

が、役場の追加採用に受かってわずか3ヶ月で関東をあとにした。

### 【事例8】親の無言の導き

〔沢田さんの職場である役場内の談話スペースでインタビューをおこなった。〕

親はあまり自分に漁師になってほしくなかったのではないかと思っている。父親も船酔いのために操船しながらハコメガネ（ハコガラス）で海底を覗くような漁はできないので、昆布漁に限っていた。友人から聞こえてくるかんじでは、かれらはこっそり船を運転させてもらったり漁の仕方を教わったりしていた。それに比べ、「うちの親は本当にこう、ただ手伝わせる感じで、こういう作業を覚えて将来お前がやるんだよ、という気持ちは感じなかった」「あまり積極的には教えないのかなって。自分自身も昆布しかやってないから。…昆布が悪いばお前も出稼ぎに行くのかっていうかんじになるのもあれなんで」。

大間高校には「勉強が好きじゃなかったこともあって」、中学の友だちも多く進学するし「中学校の延長みたいなかんじで」進学。中学時代に柔道をやっており、当時大間高校にいた有名な先生のもとで柔道をやろうと思っていたが、入学したらその先生はよそに転任した。

高卒後の進路については、どうするかこれもあまり考えず、「まあただ、大学進学するより働きたいというので」関東の警備会社に就職した。その年の6月まで、約3ヶ月働いた。勤務地は埼玉県の川越市、住んでいたのは上尾市。高校にこの会社の求人が来ていて、応募した。ほかにも運送会社などから求人が出ていたが、条件がよいと思いここにきた。警備をやりたいという気持ちはなかったが、首都圏で働いてみたいという気持ちがあった。募集のときには勤務地の詳細はなく、「ちょっと、結果埼玉になったんですけど」。この就職に関しては、進路指導の先生や、クラスや部活の友人と相談したことはなかったと思う。両親も「どうしろこうしろは言わないです」。県外に出るということに関しても、両親はとくになにも言わなかった。

卒業する年に、そのタイミングで役場の採用はなかった。だがその年に2人か1人、役場で急に辞めた方が出たので、追加の採用募集が2名出た。その報せと、受けないかというすすめを、親から電話で受けた。「まあ将来的に、長男だし、地元にいるほうがいいのかなってのをいろいろ考えて、で、帰ってきて試験を受けた、という感じですね」。受かったら転職するという腹づもりで、勤めていた会社にはちょっと後ろめたい気持ちはあった。試験やって、すぐ採用されたので辞めて帰って来た。役所に落ちたら、ずっとそのまま続けようかと思っていた。帰ることが決まったときも、とくに地元の友人らに連絡したわけではなかった。一番親しかった友人は自衛隊に入隊した（かれはその後やめて、東京の方で就職した）。近しい付き合いをしていた友人達はけっこう出て行っていたのだ。

沢田さんの両親は、進路についてとくに「どうしろ、こうしろ」と言わず、いわば無言の導きのようにして沢田さんを送り出し、しかし役場の追加募集のときには電話でしっかりと背中を押して

Uターンの契機を作っている。こうした形での親や周囲の近親者の静かな方向付けは、ほかの事例にも多くみられることである。それはやはり、「長男は（大学に行ってよい就職をしていない限り）本来家に残る」という規範的前提をあるていど共有していてこそその方向付けであろう。長男が家に残るのかどうか、は常に親子にとっての考慮事項なのだ。

またこの契機が、【事例6】【事例7】の氷見さん、杉田さん同様に、結婚前に到来したことも重要である。沢田さんは帰って来て役場に勤めてから知り合った津軽出身の女性と結婚した。いまはむつ市に住んで役場に毎日通っている。いわゆるJターンだ。つまり「家を継ぐ」という考慮事項は沢田さんに関しては再び宙吊りになっている。

### 3-3-2. 戻って来たけれど

ここで扱うのは2人の女性の事例である。前項3-2-1.では地元での就職が確定して戻って来た事例だが、こちらはかならずしもそれが決まっておらず、つまり地元に戻ることにについては積極的な誘因をあまり持たずに戻って来たという事例である。それでもUターン後、かの女たちはそれまでの経験や資格を活かして職に就き、やがて地元に着するに至る。

#### ①ふたたび東京へ！

北田さつきさんは、1985年度に高校を卒業。3人キョウダイの末っ子で、上の兄とも年が離れている。姉も地元にいる。実家は漁師。高校卒業後、東京の私立大学の夜間の短大に入学、「通学社員」として働く。短大修了後にいちど地元に戻ったが、ふたたび上京して職に就き、4年間働いたあとに地元に戻って来た。

#### 【事例9】33歳厄年、気づいたらみんないる

[北田さんの職場である役場内の談話スペースでインタビューをおこなった。]

実家は昆布漁や出稼ぎでやってきていた。昆布漁一本では難しい。他の家でも、昆布漁のところは出稼ぎとセットだった。女の子でも、土日休日や夏休みには手伝いをした。母は、学校優先の考えだったが。男の子のなかには、漁のある日は学校に遅く出てくる子も多かった。

中学校卒業後は、男子は水産修練所に行く人もいて、そこに行った人はほぼマグロ・イカの漁師になっている。女子の中卒就職の進路としては、愛知県や静岡県の紡績工場があって、そこで昼働いて夜間学校に通う「通学社員」をやっていた。中学校の同級生の半数以上が大間高校に進学した。進学した理由はとくにない。ほかの進路を採った人の方が、いろいろな理由があったのではないかと思う。両親は、自分が（高校を）卒業したら大間から出て行くのではないかと思っていたので、高校は大間でいいんじゃないかという感じだったと思う。当時は大間高校の卒業生は卒業したらほとんど地元を出て行っていた。

高校卒業後、東京の私立大学の夜間の短大に入学。世田谷に住んでいた。通学社員だったので、

社員寮で暮らしながら通学できた。派遣された先は「ニュー東京」や「ジョー」という飲食店。日中4時間働く。高校の進路指導からこの通学社員制度のある勤め先を教えられた。同級生の女の子5-6人も、同じ会社に勤めたのでひとりじゃなかった。職場と寮はちがったが、東京でも頻繁に会えた。

高校同級生120人中、大学進学は20人もいなかったのではないかと。ほぼ就職した。就職状況は進路指導室に貼り出してあったので、状況はだいたいわかった。県外就職が7割くらいじゃなかったか。自分の友達のなかでは、看護師、バスガイド、東京の信用金庫などに就職した人がいた。みな県外に出て行くものと思っていた。それも、ほぼ東京都その周辺というイメージ。同級生で地元に残ったのは、電源開発関連の就職者が3人、漁協が1人、信用金庫が1人。「電源」は、募集の最初の年だった。

短大を卒業して1年で地元に戻って来た。最初から4-5年で戻ってくるのだらうと思っていた。そのように言って、東京に出て行っていた。東京で就職活動はせず、地元での仕事のあてもなく、ただ漠然と戻って来た。まず地元で車の免許でも取ろうと思った。免許を取ってから仕事を探し、アルバイトした。だけど仕事は見つからなかった。東京の友達はOLをやってるなァと思って、折りをみて東京の友達を訪ねたこともこの時期あった。

そして再上京。千代田区にある先物取り引きの会社に就職。そこで4年勤めた。給料は良かった。江戸川区の西葛西というところに住んでいた。通学社員をやっていた短大時代の1年目に、高校の担任の先生が来てクラス会を開いたことがあった。その後再就職して勤めていたときも、友達とはよく渋谷などで集まって飲み会をすることがあった。出席率は100%だった。

東京では、同郷ではなくても同県出身だということで友達になることもあった。東京にいた間は盆、祭りとは正月には地元に戻って来ていた。帰ってくると、地元に残っている友達と呑んだ。女子会も、いまだに2-3ヶ月に一度やる。いまでも地元で仲がいい子たちは、いちど地元を出て行って、戻って来ている人がほとんどだ。出て行ってから、ずっと東京に残って結婚した人もいる。

勤めから戻って来て1年間は退職金があり、あちこち旅行していた。静岡に行っていた兄のところで出産があり、手伝いに行ったこともある。その後、隣村の観光協会で1年半働いた。小・中・高一緒で、そこにお嫁に行った友達の旦那からその仕事の話聞いた。

さらにその後、地元の役場の臨時雇いで、半年刻みの4期2年間を勤めた。正規採用のための試験は、年齢制限のために受けられない。この臨時雇いを辞めて半年で結婚し、出産し、結婚4年後に離婚した。そのあと、地元の電器屋で4-5年間働いた。そして去年の10月からまた臨時で地元の役場で働いている。

いまでは高校卒業後に地元を出た半分くらいは帰って来ているんじゃないか。よその部落の同級生でも、帰って来ているかどうかの情報はある。地元の女子会やるときには、高校のものと中学のものとは別だ。高校のときは北通全体。中学のときには、高卒のほか中卒就職組も入る地元部落出身のみ。「お互い知らないとか哀想じゃないですか」。

東京時代の知り合いとの関係も、つながりを保っている。あちらでの職場の上司も、北通に遊びに来たことがある。あちらで知り合った大鰐出身の人で、東京に嫁いだ人も来た。お互い、名物を送り合ったりしている。

東京で結婚したらずっと向こうにいたんだろう。女性のUターン組は、半分くらい独身だ。自分の同級生はUターン組が多い気がする。「知り合いの結婚式の余興なんか、なにやればいいの？」みたいな笑い話をすることがある。Uターンで戻ってくるのは、みな30歳前後ではないか。「33歳厄年、気づいたらみんないる」。帰ってきてもしごとはない。ハローワークと、友達や親戚の口コミ。地元を出て行って戻ってくるパターン、息子より娘の方がずっと将来両親の面倒を見ると思っている人が多いように思う。それがみんな独身だという話だが、「私の周りだけか？(笑)」。

11歳上の兄はずっと遠洋マグロの漁師だった。静岡の人と結婚した。地元に戻ってくるかと思っていたが、帰ってこないかもしれないといまでは思っている。姉は高卒後に保健の先生の学校で、神奈川県専門学校に進学。神奈川で結婚し、先生になって戻って来た。夫と一緒に地元に来たのだが、その後別れた。自分が短大時代にも会社時代にも姉は神奈川にいた。自分が大間に帰ってから、姉さんも地元に来た。

両親とは別の家に住んでいるが、昨日もおかずを持って行った。週に2-3回は会う。日曜日は両親と姉、姪といっしょに実家でごはんを食べる。

仕事は、いまの臨時をできるだけ長くやりたいと思う。4月に(契約更新の)面接と小論文の試験がある。今回雇われたのは、おなかが大きくなった人がいて、声がかかった。ラッキーだった。兄が帰ってこなかったら、息子もここに残りたいと言うし、実家に入るかなという感じ。

北田さんは、いちど地元に戻ってまた上京し、その後また戻ってくるという複数回往復パターンだ。これがよくある移動パターンなのかは、現時点では把握できていない。少なくともかの女の話から分かるのは、高卒Uターンの女性も一定数いるということ、Uターン女性は40歳代半ばの現在独身が多く、また帰って来ても仕事はない(あっても非典型雇用)という点だ。

地元での就職については、北田さん自身は2度目のUターンで地元に戻って来てからは複数の非典型雇用を渡り歩き、現在は役場の臨時雇いであり、できるだけそれを長く続けたいと言う。また、いちど結婚して、相手を地元連れて来たがその後離婚という経緯の背景には、県外出身の相手が北田さんの地元馴染めなかった、という事情が考えられ、結婚後のUターンが男性にとってより女性にとってのほうがより困難が大きいということも想像できる。

これまでの男性たちの事例との目立った違いとしては、北田さんが自分のもつ人的ネットワークの重要性を意識して言及している点である。同じ地元中学出身者、高校出身者の集まりを定期的に持っていて、東京時代の知り合いともつながりを保っている。

北田さんは、「兄が帰ってこなかったら、実家に入ろうかな」「息子もここに残りたいと言うし、実家に入るかな、という感じ」と言う。遠洋漁業の漁師である長兄は静岡出身の女性と結婚し、静

岡に移住した。この先、この兄がUターンを念頭においているのかどうかは北田さんにも不明だが、「帰ってこないのかもしれないと思っている」。これはつまり、考慮事項として「長男が家に残るかどうか」の先に「長男が残りそうにもないなら誰が残るのか」という展開問題があり、息子・娘に関わらず、『長男家督相続の非デフォルト状態』のなか『誰が家に残るか』という考慮事項をめぐる男女キョウダイ間の水面下の長期交渉があることを意味している。

## ②教師になり、結婚退職

島田かよさんは1984年度に高校を卒業。現在は夫とともに北通にある自営の店舗を切り盛りする。高校卒業後に「通学社員」で短大を出て、戻って来た。機会を窺おうと、荷物はしばらくほどかずにいた。その後、意を決し、北通で資格を活かした代用教員、非常勤講師の途に踏み出し、10年近く小学校・中学校の音楽教師として働いた。

### 【事例 10】教師になるまでの道のり

[かよさんが夫の一人さんと働いている自営商店にお邪魔し、一人さんとかよさんに順にインタビューした。近所の年輩の漁師さんと奥さんらが、1時間に5-6人ほど、昼食や煙草を買いにやってくる。]

中学校の同級生の8割は大間高校に進学した。それ以外の(むつや青森の)高校に進学したのは、公務員の子どもや商売をしている家の子どもで、漁師の子どもがよその高校に進学というのは、聞いたことがない。

中学校卒業して働くとかそういうことは考えてなかったもので、必然的に大間高校に行く。自分としては他にも行ってみたいという気は少しはあったけど、下宿するという経済面を考えると親に行きたいということは言えない。当時はいまみたいに情報もなかった。ここから出るということならもう100%下宿なので。中学校の面談があって、先生が「いいんですか、大間高校で」って親に確認されて、親がひとこと「どこに行っても勉強するのはいっしょだから、大間でなんも差し障りありません」と言ったのが記憶に残っている。自分もそれほど他所の高校に行くという信念ほどのものはなかったの、「まあ大間だなあ、っていう」。中卒女子では、地元を出て紡績に就職する人もいた。こっちにいても就職先はなかったんじゃないかな。紡績に就職して、定時制も受けて短大にも行けてという「通学社員」になるという定番コースがあった。高校は友だちとかとワイワイっていうかんじで、行かせてもらえるだけありがたい、というのがあった。

進学クラスにいたが、4年制大学に進学希望するのは10人くらい。その10人は数学でも英語でも授業は別で、同じ教室ではなく図書室とかに行ってお勉強していた。夏は合宿して勉強。「死ぬ目にあいながら、夜も9時、10時、11時まで必死で次の日の課題みんなでやって…でも楽しかったけどね。泊まって、(みんなで)ご飯食べて、風呂さ行って」。

実家は測量士だが、親戚の家とかで、小学校のときから昆布干しの手伝いをした。「それがいや

でいやで。」いまの昆布の量の何十倍だった。中学校とか、そのせいで遅刻というのは暗黙の了解だった。親は司法書士になればいい、とっていたみたいだ。

自分はこっちにいて就職する気はなかった。「とにかく一回、都会さ行ってみたいっていう…都会へのあこがれ。行くためにはだから、どっか就職とか考えないと…」。むつや青森は高校生でも行ったことあったが、やっぱり東京に憧れがあった。親戚も東京にいたので、高校時代も一度、二度行ったことはあった。

がむしゃらに勉強してというタイプではなかったから、まず現状で入れるのはどこだろうと考えた。小学校のときと中学校も1年、ピアノをちょっとやっていて、それを活かすにはまず保母さんや幼稚園の先生と思った。だけど、小さな子はそんなに得意じゃないな、と迷ったりもした。「だって、親ば説得しねばなんねえってのがあんなしな。お金出してもらわねばなんねえし。親が納得するんはなんだろうと思って」。なんとなく、先生になりたいという希望はあったので、音楽の先生はどうかと思い、尊敬していた中学校の音楽の先生のところに、どの大学を出たのかを聞きに行ったら、専門学校で2年間だという話だった。それならもしかしたら親も（お金を）出してくれるかもしれない、と思った。「とにかく2年間行かせてけれ、と。で、親もわいの性格知ってるして、やってばやって言う人だから…したら2年間だばまあ行ってこい、と」。

そのとき両親は「ちゃんと勉強してこい」と言うだけで「2年終われば帰ってこい」とはとくに言わなかった。複雑な話し合いのようなことはやった記憶はいっさいない。自分でも2年経ったら戻ってこようとかそういう計画はなかった。「なりゆきかな…なんだろそんなに深く考えても…とにかく行ける、出れるって嬉しかった記憶が…不安も期待もあって…」。

入学した専門学校は、階上が寮になっていた。学校終わって階段あがればすぐに寮。幼稚園も経営していて、昼間の園庭では子どもがにぎやか。同級生でその学校を受験した人はいなかったが、たまたまむつから来ていた男子はいて、かれの付き合っていた彼女は同級生だった。土日、それに授業終わって5時、6時からアルバイトもやっていた。近所のコンビニとか、その前はひと駅離れたレストランのウェイトレスとか。バイトをやってる寮の友達から募集の話を聞いてはじめ、寮の門限時刻のギリギリまでやってた。

2年間が終わったが、もう1年下の幼稚園で実習して足りない単位を取れば幼稚園の免許が取れる。もう1年いたいな—とってはいたが、それはやっぱり親に言えなかった。「母親もちょっと体調悪くて、とりあえず一回帰ろうと。荷物をまとめて、帰って、荷物ほどかないでずっといた。もしかしたら、チャンスが来るんでないかなと思って。しばらくほどかないで置いて、なんとなくやっぱり…」。帰ってきて、(教員になる資格は取っていたので)教育事務所にも電話したが、まだ気持ちの整理がつかなかった。やりたかったのだけど、自分をはたしてそこでできるかどうかという不安が先に立った。講師の口があっても受けられなかった。「なんか、踏み出せなかった。」

結局2年くらい、父親の家業の手伝いをして、自分でもそのままではダメだなあと思っていたところ、知り合いから地元の銀行でアルバイトを募集しているから行ってこいと言われた。「なんか

こう、自分を変えるチャンスかなあとと思って」。しかしその銀行の仕事には馴染めなかった。「やっぱりわいがこれやりてえんじゃねえ」と思うにいたる。悩んで小学校のときの先生に相談に行った。そしたら、わかった、ちょっと声かけてみるからということで、いろいろ先生たちのツテで話してくれ、たまたま9月に音楽の先生が病欠の小学校があるから来ないかという話があった。「よし、ここだ、これを逃せばもうダメだと思って。で、銀行さすぐ『辞めます!』って言って(笑)」。結局、銀行はそのときまで7ヶ月勤めていたが辞めて、次の日から小学校の代用教員としてバス通いで勤め始めた。その小学校にいたのは2ヶ月と少し。そのあとも、運良く別の小学校に代用の話があって、その年の年度末まで。

以後は、代用から非常勤となって、自分の出身小学校を含む北通の小学校を3校、それぞれ3年間、1年間、1年間と渡り歩く。そのあとに、地元出身中学校で3年間勤めたのを最後に結婚退職した。中学校のときは、ちょうど小学校で受け持った生徒が中学校にあがってきており、成長している姿が見られてよかった。

教師をつとめていたということも関係しているのか、かよさんの結婚までの軌跡は典型的なローカル・トラックを辿っていると思えるものでありながら、その語りは「進学」「卒業」「就職」「転職」などそれぞれの移動契機に主体的に立ち会い、悩み、決定したというものになっている。たとえば、高卒後東京に出ようとするとき、お金を出してくれる親を説得するため、自分にとっての妥当な進路を考えている。これは、これまでの事例に登場した多くの方々が、進路決定の際の意識のあり方として「なんとなく」や「たまたまその仕事に」というように「とりあえず出て行く」ことを焦点化していたのとは対照的である。自身を、言いだしたら聞かない性格だと評するかよさんは、ものごとの筋を通す性格でもあるので、親は「2年終わったら帰ってこい」とは言わなかったにもかかわらず、短大を1年延長したいということを言い出せずにUターンする。

再上京の機会を窺いながら、父親の仕事の手伝いをしていた時期は、かよさんのこれまでの人生のなかで苦境といえるかもしれない。その苦境を切り開いたのはやはりかよさん自身だ。北通内の他村に転任した中学校時代の先生に相談をもちかけ、意を決する。その後10年の教師生活の最後を、出身中学校で終えたという話をするときのかよさんの表情は明るい。

このように、契機にともなう熟慮が焦点化されたかよさんの語りだが、考慮事項としてなにが働いていたのかは、あまりみえてこない。これまでの「いったん東京へ出て結婚前にUターン」という地元公務員就職の男性たちの事例（【事例6】～【事例8】）とは異なり、女性の事例（【事例9】～【事例10】）は近親者など周囲からの方向付けのエピソードもあまり聞かれない、という点も特徴である。

### 3-2-3. 大間高校開校前のUターン

これまで3-2-1.項および3-2-2.項では、1980年代に高校を卒業した、Uターンのボリュームゾーンとみられる世代のUターン経験をみてきた。普通科高校が開校したことで、経路に多様性ができたこと、バブル景気による都市圏での雇用状況の好況がその背景にある。では、そもそも高校が開校する前の経路はどのようなだったのか。これを検討するには本来、同数のインタビュー資料を必要とするが、ここでは現在までに得られた資料のなかから、2人の特徴ある典型例を示すにとどめておく。どちらの方も60歳代の男性で、かれらが中学校を卒業した15歳のとき、大間高校はまだなかった。

#### ①跡取り息子のエリートコース

前田泰さんは1950年生まれ。現在は地元の教育委員会に勤めている。実家は父親まで2代にわたって養子をとっていて、前田さんは長男、待望の跡取り息子だった。当時としては例外的に、青森市の高校に進んだあと大学進学して卒業、その後Uターンして役場に勤めている。

#### 【事例11】 当時は例外的な大卒Uターン

[要職にある前田さんは、役場にご自分の部屋をお持ちだ。その部屋で話をうかがった。]

地元の小学校に通っていたとき、先輩たちが集団就職の時代。当時の大畑の駅から列車で上野に向かっていた。子どもの頃までは、地元の部落には製材所がいくつもあって仕事もあった。「昔あれですよ…私の小さいころは、山でしたよね」。青森高校に進学した。当時高校に進学する者も少ないなか、地元の部落から青森高校に進学した者は、現在に至るまで10人くらいではないかと言う。「まあ母親が、そういう道を開いてくれたんでしょうね」。

青森高校の専務をやっていた家に、朝夕の賄い付きで下宿していた。筒井中学校の近くの軒家。弟も進学して来て、下宿人は兄弟ふたりだけだった。その後に茨城大学に進学して有機化学を勉強した。最初医学部も目指していた。弘前大学も受けたが、当時は30倍以上の倍率だった。26歳のとき(1977年)にUターンで役場に就職。「長男なもんですから」。親の面倒をすすんでみる者も少ない時代に、奥さんには両親の面倒をずいぶんみてもらった。親の面倒を見ようが見まいが、いまは権利上は平等だという考えなので、帰ってくる者も少なくなるのだろう。

前田さんが中学校を卒業する1960年代半ばには、まだ地元で製材所が8つあった<sup>14</sup>。役場や郵便局、消防署の他に営林署や製材所が、当時漁師になる以外の中卒の地元就職先としてあったようだ。しかし、長男として母親に教育投資され青森高校を経て大学に進学した前田さんは、自分が家

<sup>14</sup> この情報は前田さんと同じ地元の別のインフォマント(1943年生れ、男性)から得たもの。かれによれば、製材所は中卒の若者の地元就職先となっていたが、給料があまりよくはなかったので、就職しても長続きしない若者が多かった。

を継ぐべきなのだろう、と長男家督相続の規範的前提を受け入れることによって、本来なら高学歴によって手に入れることができたはずの都市部での暮らしや階層移動の契機を手放して地元でUターンしている。

長男であるから自分が家を継ぐということは、前田さんの念頭につねに考慮事項としてあったようだが、同時にかれはそれが時流に適わないものであり、たいへんなだけで見返りはない<sup>15</sup>、という状況に自分の妻が犠牲になったと語る。それをわかっていたはずの前田さんはしかし、近親者からの方向付けによって移動パターンが強く規定された色合いが強く、Uターンせざるを得なかったのだ（もっとも、インタビューではUターンの具体的な契機が何だったのかは明らかにされていないが）。

## ②Uターンして漁師、親の面倒みる

小野静雄さんは1953年生まれ、「6人キョウダイの5番目、三男」。中卒後に北洋漁船に乗り、その後姉のいる埼玉で働き、知り合った女性と結婚後にUターンした。その後2男2女を設け、末の息子がすでに大学生となった。現在までずっと、地元で漁師をやっている。地元の子ども会の会長を長年務めたなど、地域活動についてはとても熱心な人だ。

### 【事例12】アニ出ている家は、けっこうある

〔小野さんのご自宅。時化の日で漁はいっさいなくなったということで、長居させていただいて、奥さん同席のもとお話を伺った。〕

父親は漁師で、子どもの頃から漁を手伝ったし、波に乗って流れて打ち上げられた昆布など、熱心に「浜拾い」もやった。昆布は当時大量に流れて来ていた。漁協がスピーカーでアナウンスしたら、学校が授業中でも抜け出して拾い昆布をした。当時は昆布漁が本格的に始まると、学校には1ヶ月も行かなかった。自分が子どもの頃のじいさんばあさんは、年金もらってでも拾い昆布をやって漁協に出荷すると小遣いを稼げた。それで正月前でも稼いで、孫にお年玉をやったものだ。だから、昔は年寄りでもいまよりお金を持っていた。

地元の中学校を卒業するときに、当時隣の部落にあった定時制の分校を受けたが、行かなかった。「中学校を卒業してからベーリング海に行ったから」。外の高校に行った者も5-6人いた。あのころは、親を助けるために働かなければならないという考えだったので、自分が高校進学することは考えなかった。実家は当時、昆布、ウニ、アワビの漁をやりながら（父親は）建設会社で土方仕事にも行っていた。自分は日本水産の漁船に乗って、北洋に行った。長兄も北洋に行っていたし、地元の先輩からも声をあつけられた。兄の頃は鯨の最盛期、自分はスケソウダラ。20歳になる頃まで、5-6年船に乗った。

<sup>15</sup> 前田さんが暗に示唆しているのは、長男子単独相続を原則とした旧民法（1898年施行）に対し、現民法（1948年施行）上では法定相続人が、長男家督相続は廃止され均等分割相続となっているということであろう。

ところが200海里問題で日本の漁業権が縮小され、スケソウの取れ高も少なくなるというので、これは将来ないな、と思って切り上げた。ベーリング海で操業できなくなるんだから、船に乗ってもカネにならない。続けた人が多かったが、辞めた。長兄ももうそのころには船をおりていた。船が出航した春海埠頭に見送りに来た地元の4つ上の先輩に北洋漁業ももう先がない、という話をした。その先輩は鉄筋工だったもので、だったら来ないかという話になり、2年間ほどやった。サンシャイン60の基礎工事もそのときやった仕事のひとつ。

また、結婚した姉が当時すでに埼玉の桶川にいた。その姉の夫がゲーム機の本会社に勤めていたのだが、当時はインベーダーゲームが大流行していて、儲かりそうだから一緒にやろう、と持ちかけられ、かれも会社をやめて一緒にやることになった。工場から出荷されるゲーム機を買い、それを店舗に貸し出す。生産が追いつかずに、1台のゲーム機を2カ所に順番で貸していたこともあった。北洋船を降りたばかりの頃は、まだこっちの言葉（方言）だったので営業のときに恥ずかしかった。通じてはいるようだったが、まだ若かったので女性と話す必要があるときにはとくに恥ずかしかった。鉄筋工時代には先輩と蒲田のアパートに住んだが、このころは桶川の姉に住む所も世話になった。

こうしてゲーム機を貸し出しているスーパーにアルバイトに来ていた当時18歳の奥さん（栃木県出身）と知り合った。20歳台の終わりに結婚して、奥さんによれば「半年もしないうちに」「田舎さ帰る、漁師やる」ということで北通に帰って来た。

そのとき親は70歳になっていた。「兄が、もう家を出ていってるし、このままじゃあ…ってのもあったし。ふと、田舎に帰ってやるかなあ、という」。ほかのキョウダイ（姉と妹、兄2人）は揃っていまも関東にいる。帰って来て1年ちょっと、2番目の子どもが生まれたころ、母親が亡くなった。その後も父親は10年くらい、83歳で亡くなるまで漁をやっていた。

もともと家に残るといふ気持ちはなかった。兄が北洋船を降りてそのまま家に戻っていたら、帰っていなかった。「家のことは、そんなに…兄が出ねえ限りは心配なかったし、帰ってくるって気持ちもぜんぜんなかった」。兄は、漁にもあまりむいていなかったのかもしれないし、結婚相手（ヨメ）を連れて実家の親とうまくやる、ということもちょっと無理だったのかもしれない。母親が、きつい性格の人だったから。相手が外の人だったらなおさらだ。しかし、「こういう流れ…『アニ出ている家』はうちに限らず、けっこういる」。まだ（長男でなくても）誰か息子が残っているのだったらいいほうだ。

結婚するためにはやっぱり、経済的なことも絡んでくるから、あるていど、漁師やるにしても決まった収入、年間最低でもこのくらいとか、組合とかそういうことも考えなきゃならない。しかしマジメに（漁師を）やってれば、そんなに予測できないということもない。でもそれなりの覚悟もいる。昆布採ってたら大変だってのもあるし。これだけは、人それぞれの考えがあって、ひとりで年間300万円ならそれで暮らしていければいいと考えている人もいるだろうし、子どもやおかあちゃんいない人はそのくらいでなんとかなるんだろうね。それなりの生活水準保てる。でもおれ

たちみたいに子ども4人もいて、そうなるも持たないし、借金してでも子どもを学校に、と思う。

前田さんに比べ、小野さんはこの世代のUターンのひとつの典型を体現している。中卒後に北洋漁船で働いていたが20歳のころに200海里問題で見切りを付け、地元の先輩に相談して最初の転職をする。いったん機を読んだら決断が早い人という印象だ。その後ふたたび転職して、埼玉にいる姉の夫と商売を始め、30歳前まで従事したあと、Uターンする。小野さんが、その商売の先行きをどう読んでいたのかは分からない。もともと「親の加齢」「誰が家を継ぐか」という考慮事項があり、「結婚」がUターンの契機となった形である。

しかし、小野さんの奥さんは関東出身で、奥さんは結婚を決めたときには北通に移るとは思っていなかった。小野さんはその点でたいへん苦勞をかけた、と言う。通常、「いずれ地元に戻るなら、結婚相手は北通の人が（相手にとっても）よい」とされている（考慮事項）。その小野さん自身も、当初は自分の兄が家に居ることになるだろうからと思い、「帰ってくるって気持ちもぜんぜんなかった」。しかしその兄のようすをみるにつけ、次第に、兄は実家に居られないだろう、と思うようになったと言う。Uターンすることについて、兄弟間や親との直接の話し合いはまったくなかったと小野さんは言う。「長男が家を継ぐこと非デフォルト状態」はつねにキョウダイ間の実家をめぐる動きで遂行的に顕在化する。「誰が家に居るか（残るか）・帰るか」についての交渉が、長期にわたる水面下のものとなるゆえんである。

#### 3-3-4. 自営業に就く

先の3-2-1.および3-2-2.で紹介した1980年代のUターン組は、男性が公務員になった人が多数であるのに対し、女性が非典型雇用（臨時雇いや非常勤）に従事しているという傾向をみた。一方で、北通には一定程度自営業に従事している人びとがいる。自営業は、家業を継ぐという形で就職できる場合も多いため、地元で他出者の後背につねに第2、第3選択肢として控えている「漁」と似通っているとも言える（考慮事項）。ここでは、Uターンして自営業に従事している2人の事例を紹介する。

##### ①三男、家業を継ぐ

島田一人さんは1983年度に高校を卒業した。三人兄弟の三男。現在は父親が経営を始めた商店業を継いで、奥さんのかよさん（【事例10】）とともに店を任されている。高校卒業後は関東の私立大学に進学、そのまま関東で就職し、札幌に移り、30歳のときに地元でUターンした。

##### 【事例13】極めたいことに打ちこんだあとに

[自営商店にお邪魔し、一人さんと奥さんのかよさんに順にインタビューした。近所の年輩の漁師さんや奥さんらが、1時間に5-6人ほど、昼食や煙草を買いにやってくる。]

地元の中学校の同級生は15人で、そのうち12人が大間高校に進学、女子3人が紡績関係に就職した。高校に進学することは迷わなかったが、外の高校には行きたかった。いちばん上の兄は、中学校から青森市に出て、青森高校に行った。青森に親戚がいた。自分はむつの田名部高校に行きたかったが、青森は考えなかった。兄の場合は基本的に勉強と進学が目標、自分の場合は地元を出たかったということもあるが、部活のことがあった。格闘技に興味があったのだが、ボクシングや柔道は田名部にはあるが大間にはなかったのだ。

高校2年生からは、進学クラス。卒業後は、専門学校などに進学すればいいかなと思っていた。大間高校は学校の授業だけでは進学はまったく無理で、「わいどの先生でも先生が（学校に）泊まり込んで勉強教えたりとか、そういう環境」。先生も、そういう意欲的な先生がいた。

卒業後は、地元を出たかった。小さい頃から格闘技が好きで、強くなりたかった。だから東京に出たかった。その手段として進学。いろいろ調べて、推薦入試があった埼玉の比較的新しい私立大学に進学を決めた。高校のときは大学に行くつもりで勉強をしていたので、両親は、とくに大きな反対もなかった。東京には兄貴がいて、長兄といっしょに東上線沿いにアパート借りて住んだ。兄も空手の道場に通っていたが、自分は兄とは別の道場に、東京に着いたその日のうちに行った。この空手道場の本部はもともと仙台だったが、ちょうどそのころ本部が東京の、住んでいるところの近くに移って来た。だから完全に道場中心の大学生活で、大学のほうにはあんまり友達はいない。アルバイトばかり。学校には行っていたが。友達は道場のほうで。地元へは、年にいちど、帰ってくるか来ないか、といういどだった。

高校の同級生は、半分くらいが東京の方に出て就職したように思う。上京した高校の友達とは会ったりしていた。4年制の大学生になった自分はやや特殊だった。大学には5年間いたが、そのあと酒・食品の間屋に就職した。当時はまだバブルで、仕事をそんなに選ばなければ、受けたら採ってくれた。その会社はアパートから近かった。会社勤めになってから、地元の友だちと会う頻度は徐々に減っていった。当時は携帯電話などなくて、転職すると連絡がつかなくなる友人がいたこともある。

その会社は2年半～3年働いて辞めた。学生の頃に優勝して全国1位になったりした。会社は行ってからも続けてはいたが、「だんだん染まって弱くなっていく。練習量が減るから（笑）」。空手に専念したくて、道場の東京本部の職員になった。その1年後に札幌に出来た北海道本部の師範代を2年間務めた。空手には専念できたが、当時は、師範代の給料では「それでヨメもらって生活できる」レベルではなかった。

上のふたりの兄は、関東でちゃんと仕事をして生活している。一方、兄たちが実家を継ぐかどうかはあてにならない。「わいの場合のはあの、おらぶら…結局おらぶらだいの、ある意味（笑）」。それで、18年前、30歳のときに地元に戻って来た。戻って来たときに、学校の同級生で地元に残っていたのは2人しかいなかった。戻ってくるときに、兄たちと特別に話し合ったということはない。

戻ってくると改めて地元で暮らすことのよさがわかる。東京に出て行ったのも、ここにはないもの

を求めたから出て行ったというだけだ。そういう生活がいつまでもできるわけじゃない。「それ相応の年齢になれば、それ相応の、のう…」。

後の【事例18】で明らかになるが、島田一人さんの次兄は、他出先で結婚した奥さんと一度地元に戻って来て、しばらくしてまた関東に戻っている。ちょうどそのあとに、一人さんが札幌から戻って来て地元におさまった形だ。長兄が関東の大学を卒業後に帰ってこずに就職した時点で、潜在的な懸案事項であった「長男が家を継ぐこと」の非デフォルト状態下でのキョウダイ間の長期交渉」がはじめに顕在化し、つぎに次兄がいちど戻って来た時点で収束に向かうかと思いきや、一人さんがUターンして落ち着くまで、水面下での交渉が続いていたと言えるだろう（この交渉の終点がいつなのかは興味深い問題だ）。

## ②地元で開業する

川野浩二さんは1977年度高校卒業（2期生）。仙台の自動車関係の専門学校に進み、その後東京のトヨタに10年勤める。そのあいだに同じ地元出身の女性と結婚。30歳を過ぎてUターン。その後自分で自動車整備工場を建てて開業する。つまり川野さんは、家業を継いだのではない。

### 【事例14】夢は老後の漁師

[川野さんが経営する地元の自動車修理・整備工場での仕事にお邪魔して、約1時間のインタビュー。現役の大間高校生2名と進路指導教員も見学のために同行したためか、導入では川野さんの高校時代の武勇伝が披露された。]

当時は地元の中学校を卒業したら、サケ・マス船に乗ることが普通にあった。自分はむつ工業高校に進学したいと思っていたが、親は、大間高校ができたので3年間行かせてやるか、ということだった。地元の中学校は3クラスあって、大間高校へ6-7割が進学した。外の高校に進学する子もいた。九州の水産訓練所に行った同級生もいるし、女子は関東方面の紡績関係に行く子がいた。

高校の頃はやりたい放題で、ナナハンをぶっ飛ばして警察に捕まり停学になったこともある。ラグビー部の顧問の先生にはいろいろお世話になった。

高校卒業後、仙台にある自動車整備専門学校（現在の自動車大学校）に1年通った。終わったら帰って漁師をするつもりだったが、東京トヨタを受けてみないか、と専門学校の先生に言われて、トヨタに入社することになった（1979年）。ここも1、2年で辞めるつもりだったが、結局10年勤めた。入社して、町田市鶴川に勤める。寮は、府中にあった。地元から東京に1年遅れて出ていた女性が墨田区の産婦人科で准看護師をしていた。かの女と相模原に住み、子どもが生まれてからは、町田市の公営住宅に移った。仕事は、整備からフロントサービスまで何でもおこなった。手取りで54,000円ももらっていた。家賃と食事は会社持ちだった。

1983年に結婚。式を挙げる予定はなかったが、父親が妻の親に申し訳ないということで、有給休暇を2日だけもらって、地元の青少年勤労ホームで結婚式を挙げた。翌年に長女が生まれた。この頃になると手取りは増えたが、残業が多くて夜1時くらいまで働いていた。バブルの頃だったので、黙っていても売れまくっていたが、いつも眠くて眠くて仕方なかった。次女が生まれ、三女が生まれた。東京で働いているときに、東京には一生は住めないなと思ったので、結婚も大間の人とした。東京に一生住むということはない、生まれ育った地元がいいと思った。

1989年に地元に戻って来た。もう3年早く帰ってきたかったが、会社が辞めさせてくれなかった。地元で自動車整備工場を建てたかった。そのための土地を探した。従兄が働いている横浜の鉄筋工場に出稼ぎに半年いったのもこのころだ。結局、父親の持っていたスタンドの土地が更地になっていたの、狭いけれど、そこに整備場を建てた。本当はもう少し広い土地に建ててトラックの整備もできるようにしたかった。

1991年に、地元で事業を始めるとき、1,000万円を金融公庫で借金した。周囲からは3カ月で潰れると言われたけれど、父親と姉が「やってみないとわからない」と言ってくれた。1995年に会社にした。1996年に工場と自宅を建てた。こういう大きな決断は誰にも相談せずにする。もし、相談してしまうと決断が鈍るから相談はしない。

その後、東京の電気屋に勤めていた義理の弟を呼び戻して、一緒に働いている。かれが板金を覚えてくれたらいいと思っていた。現在は、もう一つ工場を3,000万円建て、それを義理の弟に任せている。

最近では親戚の子どもたちが大きくなり、独立して商売をする者もいて、仕事をくれるようになった。建築関係の仕事をしているようだけれど、良かったなあと思っている。自分のマキには漁師が多いけど、最近はそのように商売する者も出るようになった。自分自身は、お客さんに関してはできる限り、個人を相手に商売をしようという方針をもっていた。会社を相手にするとケンカなどをしてしまったときに、あつという間に仕事がなくなってしまうから、個人の方がいいと思っている。ただ、親戚の子どもなんかの会社の仕事は受けようと思う。

娘が3人いるが、いま次女が里帰りして大間で一緒に住んでいる。孫は男の孫がいて、かわいい。帰らなければいいと思っている。娘も大間で暮らすと言っている。長女は看護師として大間病院で働いている。次女と孫は自分が養ってもいいと思っている。末娘は仙台にいる。将来は、60歳でこの仕事を誰かにまかせて、漁師をやりたいと思っている。今は、船はない。もっているだけでお金がかかるので、父親が亡くなったとき手放した。イカ釣りもマグロも取りに行つてやろうと思えばできると考えている。経験があるから、やろうと思っているんじゃないか、とも思う。昆布もやったことがあるし、昆布なら歳をとってもできるので、漁師をやりたいなあ、と思っている。

川野さんの事例は、Uターンして開業という比較的珍しいパターンだ。もちろん開業した修理・整備工場を可能にしたのは、仙台の学校と東京でのディーラー勤務とで得た知識・スキル・経験と

いう資源を活かしたからだ。ではなにがこのパターンを可能にした考慮事項か。これについての論点は2つある。第1は川野さんが将来のUターンを見越して、東京での結婚相手に地元出身の女性を意識的に選んでいること。第2は、60歳で引退と自ら契機を用意し、その後の生活の希望として漁師をあげていることだ。

第1は、結婚相手と時期についてである。結婚はライフコース上の移動の契機となりうるが、一般に条件不利地に移住したいという都市部出身の人は少ないため、都市部出身の結婚相手を選ぶことはUターン可能性を半ば放棄することにもなる。これは結婚についての考慮事項として北通の方々のあいだで共有されていると言ってよい。だからこそ、子ども以上に両親もUターン可能性と結婚タイミングとはつねに気になっている。北通から関東（あるいは他地域、以下同様）に他出した人の結婚相手と移動のタイミングとの組み合わせは、現実的にはほぼ（ア）関東にいるときに関東出身の人と結婚する、（イ）関東にいるときに地元の人と結婚する、（ウ）Uターンして地元の人と結婚する、（エ）地元の人と結婚して関東に連れて行く、の4つである。東京滞在が長くなれば、地元Uターンについての障壁が低い（イ）（ウ）（エ）よりも、障壁の高い（ア）になる蓋然性は高まる。東京の滞在が長くなった川野さんはしかし、（イ）を選んだのだった。

第2は、現在の整備工場を引退後に漁師をやりたい、という点だ。たとえば3-2-1項および3-2-2項に登場した根津さん、木本さん、新潟さんのように、正業の片手間あるいは副業として漁をやっている人はいる。それなりの収入（「小遣い稼ぎ」）も期待できる。しかし、川野さんの語り口は、「子どもの頃いちどやって、できるようになっていたことをやりたい」というものだった。「中途半端に分かっているから、やりたくなる」。また、川野さんの地元の方は、80歳になっても昆布採りをやっている、年取っても昆布採りだけはやる、と言う。こうした語りには、なんでも自分の腕一本とガッツでやってきた川野さんの性格と、引退したらほかの地元の年寄りと同じように過ごしたいという人生観が垣間見える。それはまた、インタビューに応じてくださったほかの多くの北通の男性が描いていた、「そもそも漁業収入は不安定」「最近は昔とちがって不漁」という経済面での漁に対してシビアな評価をする一方で、かれらが持っている「年を取ったら漁をやる」「漁はだれだってやってきたもの」「漁さえやれば、年取っても食って行ける」という、生業としての漁についての共通理解に基づいたビジョンにも思える。

#### 3-4. 東京で集まることと北通という場所

東京で生活をしている大間高校の卒業生たちは、友人と個別に会うこと以外に、毎年7月に行われる大間高校の関東支部総会や同じ集落出身者で作る同郷会などで定期的に集まり、お酒を飲み、自身や故郷の近況を報告し、おしゃべりに興じる。

大間高校同窓会関東支部会総会には、首都圏に在住している卒業生のほか、大間高校の校長、前年度に3年生を担当した教員、進路指導の教員、そして同窓会の会長が出席している。2014年の東京支部総会においても2015年の会でも、第6期生（1981年〈昭和56年〉卒業）が半数以上で

あった。男女半々の参加率である。

かれらの職業は、どちらかといえば「青森から出てきて成功した」人の就く職業であり、「余裕のある」生活が営める職業だといえる。それは、彼らも承知しており、「みんなに出てきてほしい。同窓会はそういう〈=成功した人だけが来る〉ところではないんだけどね」という言葉が頻繁に聞かれた。

2014年も2015年も、同年3月に卒業したばかりの同窓会新入会員の出席はなく、それについて「先生に会いたくて普通は来るんだけどね」と残念がる50代の会員が数人いた。話を聞いてみると、彼らが同窓会に参加するにあたっては、「高校時代の先生に会いたい」という動機がある。とくに、現在50代のラグビー部の卒業生は、「ラグビー部顧問であった先生に会いたいから同窓会に行く」と参加動機を語る。これは、判を押したように返ってくる同窓会参加の動機である。

同窓会以外に、集落によっては、同じ集落出身者とその友だちが集う同郷会がある。本調査に協力してもらったある同郷会においては、10人ほどの50歳台の会員と2人の20歳台の会員を擁していた。50歳台の会員同士は、生まれてから高校を卒業するまで、同じ学校に通い、日常的に顔を合わせ、家族ぐるみの近所づきあいがあり、生活を共にしてきた18年間がある。かれらは東京に生活を移してから、頻繁に連絡をとりあっている。

20歳台の会員と50歳台の会員では、親子ほどの歳の差がある。東京に出てくるまで、この会員同士が会ったことはなくても、お互いの親戚や家族が近所づきあいを重ねているため、親戚関係のようなものであるという。かれらは、飲み会を開催することはもちろん、お盆やお正月に一緒に里帰りしたり、家を訪ねあったりしていた。携帯電話が普及し、SNSの利用が盛んになった今は、ネットで日常的にコミュニケーションをとっている。その頻度は、端で見ていると家族に連絡をとっているのではないかとと思われるほどである。誰がどのような状況なのか、仕事や家族、住まい、人間関係などについて、こと細かく情報を共有している。お互いに、心配しあい、仕事の世話などもするケースも数例あった。

首都圏在住の卒業生へのインタビューについては、この同郷会に協力してもらった。これにより、総会参加者のみならず、総会にはあまり出席しないインフォマントも紹介してもらうことになった。20歳台の同郷会会員2名にも協力してもらったが、本稿では1980年代に東京へ移住していった卒業生を中心として分析をおこなっているため、別稿で扱いたい。

### 3-4-1. 将来、地元に戻ることはないだろう

この同郷会の会員である、佐野知子さんと塩谷寿子さんという女性の会員は、データ収集の際に特に労をとってインフォマントを紹介してくださっている。彼女たちは、同郷会のみならず、関東支部総会の参加者集めを積極的に行っており、それは、彼らの卒業後の生活のあり方とも密接に関わったものであった。そこで、佐野さんと塩谷さんの事例をまず紹介しよう。

### ①地元の人間のように働けない

佐野知子さんは、インタビュー時に51歳であり、1982年に高校卒業をしている。卒業後、東京にある和装学院に就職した。その専門学校では、仕事をしながら、縫製やデザインを学ぶことができると聞いて、その仕事に決めた。しかし想像していたのとは異なっていたため、3カ月で辞職する。その後、転職や結婚、出産などを東京で生活してきた。現在、夫と息子と3人暮らしである。

#### 【事例15】出るのが当たり前だった

就職する前から、周囲の人間から「和裁は知子に向いていない」と言われていた。義理の姉（お兄さんのお嫁さん）が和裁縫の仕事をしていて、「同じようにやれたらいいな」と思って進路を決めた。実際には、周囲がいうように、向いていなかったため短期間で辞職した。

その後、同級生の塩谷さんの紹介で、社員食堂のサービスを提供する会社で1年半働き、転職して、健康食品の会社で2年働く。この会社で知り合った夫と結婚するため、22歳のときに退社した。進路を高校の進路相談に行き決めていたが、兄2人、姉2人がすでに関東等で就職していたため、卒業したら東京に出るのは当然だと思っていた。両親からの反対もなかった。長男夫婦と甥と姪が地元で両親と同居していたため、実家は問題ないだろうと思っていた。ただ、結婚する際、母親には「帰ってきてほしかった」と言われた。

現在、葬儀会社で働いている。40歳までは、義理の両親が経営している会社の事務をしていた。今は働いているが、結婚後すぐは専業主婦をしていた。長女が2歳の時、自宅の隣にある保育園に入れた。その保育園の園長には、「働いていないのがばれればよかったけど」預かってもらっていた。第二子の長男が生まれた時、そこの園長に「働きなさい。うちで今度からデイサービスをやるから手伝いなさい。」と言われて、2年間働いた。この頃は、デイサービスに資格が必要なく、誰でもできる仕事だった。「家事と一緒にだからすぐにできる仕事」だと感じた。そして、「家事と一緒にだから、あきちゃった」ので、2年で辞職する。

次に、保育園でできた友だちから誘われて、ファミリーレストランで2年間働く。その後、義理の両親が経営する会社の事務をするようになった。そもそも「自分の両親が働いていたので、専業主婦のイメージがなかった」ため、女性が働くのは当たり前だった。「地元で専業主婦は天然記念物」だった。

40歳頃、バブルがはじけて、景気も悪くなって義理の両親が経営する不動産業も、「会社儲からないし、どうする？」という状態だった。それで、「辞めるチャンス！」と思っていたところ、先の保育園の園長の娘さんが別の保育園を経営するというので、それを半年手伝った。「夢が保母さんだったし、いいかな」と思っていた。しかし、実際には「子どもが好きではないということがわかった」ので短い期間で辞める。その後、葬儀会社の募集を見つけ、「葬儀屋の仕事は、夕方からの仕事なので、朝が弱いわたしにもできるんじゃないか」と思い応募する。葬儀会社は、自分のスケジュールにあわせて働けるから自由に性格にあっている。10年前は先輩ばかりだったけど、今

は会社の古株になった。この職場では、「舞台女優さんとか、それから、バツイチの人も多いし、いろんな人に会える」ので、面白い仕事だとも思っている。社会保険も万全であり、時間の自由がきくことも魅力のひとつとなっている。10年前に較べると会社の売り上げは上がっている感じはしないが、60歳が定年なので、それまでは働く予定である。60歳過ぎると時給が5%カットになるので、仕事のできない新人よりも時給が安くなるのは、働いていて気分がよくないだろうから辞めるかもしれないと思う。ただ、今のところ、会社で健康診断もしてもらえりし、社員旅行もあるので先のことは考えていない。2015年は、函館に1泊で行く社員旅行に参加する予定である。会社の方針で「配ぜんの仕事をみるのも仕事のうち」ということから、これまでの社員旅行では、高級旅館に宿泊したこともあるし、海外旅行もある。老後は、東京の友だちと海のあるところにアパートを借りて、今住んでいるところと借りたアパートをいったりきたりする生活が夢だ。

義理の両親と同居していたときには、「帰りたい」と思ったら世田谷の姉（67歳）のところに子どもを連れて行っていた。また埼玉に住んでいた親友の家にもよく子ども連れて行っていた。この親友とは一緒に地元に戻ったりもしている。この親友は、高校卒業直後には地元に残っていたが、原発関係の仕事の人と結婚して、転勤で埼玉に来た。もう一人いる親友は、現在、青森市にいる。大間高校の同級生のなかで、北通に残る人は一握りなので、出ていくのが当たり前だった。クラスの40人中30人以上は外に出たのではないかと思う。東京にはそのうち10人くらいはいる。

東京に出てからの生活では、地元で家が近所だった親友の塩谷さんと継続してつきあってきた。社員食堂サービスの会社の寮を出てから、一緒にアパートを借りて住んでいた。この頃、このアパートが同じ集落出身者の会合場所となっていて、よく飲み会をしていた。

地元ではもう生活できないと思う。地元の間人は良く働くので、「午前中は海、午後は山で働き、日が沈むまでいろんな仕事をこなす」ような生活はできないと思う。東京に慣れるとそれができなくなる。地元にたまに帰っても、ここでは生活できないと思ってしまう。一番上の兄の長男がまだ地元に残っているが、それ以外の子どもはみんな地元から外に出ていった。ただし、次兄は、現在、千葉に住んでいるが、あと何年かしたら、地元に戻ると言っている。次兄の地元の家は、今、空き家になっているが、いつでも住めるように維持している。もっとも年齢の近い兄は、大間高校卒業した後、埼玉で警察をしている。しかし、彼も地元に戻りたいと言っている。今年のお盆は、次兄とすぐ上の兄と中1の甥と一緒に地元に戻った。佐野さんは6人きょうだいの末子であるが、姉たちには、地元へのUターン希望がなく、兄たちにはUターン希望がある。

## ②働くことの自由さと忙しさ

佐野さんと同級生である塩谷寿子さんは、1982年、高校卒業後、社員食堂サービスの会社に就職する。求人が高校に来ていたため、就職を決めた。高校の先輩たちが働いていて、これまでに3人が就職していると聞いていた。2年働けば、調理師免許の試験を受けることができるということで3年3カ月働き、調理師免許を取得した。その後、結婚し、専業主婦を経て再就職している。

## 【事例 16】将来は夫との関係でどこに行くか決まる

1人娘だったので、「3年働いたら家に帰ってくるように」と親から言われていたため、仕事を辞めて帰郷した。ただし、佐野さんと一緒に住んでいたアパートに荷物は置いたままにして、結局2カ月しか帰郷しなかった。

母は、「帰ってこい」といったものの、「地元で仕事はないし、母もどうするんだろうと思っていたんじゃないか」と思う。だから、「東京に帰る」と言った際、「仕方ない」と母は思っていたのではないか。

東京に戻り、知り合いのお嬢さんが「料理教室に勤めている」という話を知り、そのような仕事がしたいと料理学校協会に就職し、講師のアシスタント業務をおこなった。ここで約3年勤め、講師にもなった。この料理学校協会の取引のあった会社で働いていた夫と知り合い、1987年に結婚し、その後1年で妊娠して退職した。

次男の体が弱く、その養育が大変だったため、10年くらい専業主婦だった。2001年、近所の社会福祉法人で「離乳食の講師をしてほしい」という依頼があり、その法人で3年ほど働く。この頃になると次男の健康状態が落ち着いてきたので、もう少し働きたいという希望を持ち始めていた。

夫の会社の部下の妻が市役所の正規職員であったため、市役所職員の募集をしていることを教えてくれた。2005年1月に市役所に職員として就職する。食育士の仕事であり、市の地産地消を進める意味もあった。仕事の内容はレシピ作りや料理教室をおこなうことであった。非正規雇用であったが、求人票に「労組あり」と書いてあったので、「これはいいな」と思った。最初に就職した会社に労働組合があったので、「組合があるほうが安心だな」と思っていたからだ。ところが、就職してみると、労組を結成している最中であった。この結成運動に参加し、同年6月に「努力して非常勤職員の労組をたちあげた」という。それから、10年間、組合の専従職員になったり、市役所職員に戻ったり、組合か市役所の非常勤職員なのか、どちらがメインかわからないような仕事をおこなってきた。

組合の運動では、賃金を保育士と同等にするように団交して勝ち取った。組合も今後、後継者を育てて、引き継いでいくよう必要があると思っている。しかし、非常勤職員のための組合員であるため、組合員が正規で雇用されると、組合から抜けるため、どうしたらよいか思案している。「非正規から正規になることは当の本人にとってはめでたいことなのだけれど、非正規の組合だから、組合としては人材が正規のほうに移ってしまうことは痛い」と悩んでいる。

3年前から、臨時非常勤等職員協議会の議長となった。この関係で、東京の私立大学でも講義をおこなうことになった。今になって、労働法を必要にかられて勉強している。大学で講義をしてみても、今の子どもたちは勉強熱心だと感じる。自分たちの年代は、「親に迷惑をかけちゃいけないから」と思って大間高校に進学した。成績に関しても「勉強も中くらいだった」。専業主婦の頃より、自由を感じているけれど、忙しすぎる。自由と時間は「引き換えなんだ」と思う。

仕事は定年（60歳）まで働くことを希望している。これから10年間、需要が続くかどうか、今

から心配している。食育士（調理員）のポストは、正規ではない。毎年毎年（職があるかどうか）みえないことが不安であり、勉強に手が抜けられないという。毎年、試験を受けなければならないので大変だなあと感じているが、これまで9回合格してきた。試験のために、日常的に正規の職員さんともうまくつきあい、組合でもがんばらなくてはならないので、とても疲れる。

現在2世帯同居であり、千葉県にずっと住むつもり。お墓も、夫の家のお墓に入ろうと考えている。自分たちのものを購入していないが、大分県に夫の家の墓がある。今、検討中である。夫は、千葉の家を引き払って、老後は横浜で暮らしたいと言っているが、子どものことを考えると千葉に家を残しておくことが必要なのではないかとも思っている。まだ先のことなので、どこに行くかわからない。

地元には、夏に帰るようにしている。現在、両親と兄（53歳）夫婦が住んでいる。兄の子は3人いるが、3人とも地元から出てしまった。ただ、将来は甥が地元に戻ってくるのではないかと思う。

同窓会関東支部において、この佐野さんと塩谷さんは求心力となっている存在である。人間関係に気遣い、飲み会を企画し、同郷の友人たちとの結末点として機能している。2人とも毎年、地元に戻郷し、地元においても友人たちや親せきとのつきあいを盛んにおこなっている。また、関東では集落の同郷会や高校同窓会のネットワークのみならず、家族でおこなうバーベキューや飲み会に同郷の友人や後輩を誘い、同じ集落出身者の世話をしている。

しかし彼女たちは、定年後、地元でUターンする意志はなく、関東圏にとどまるのではないかと感じている。塩谷さんの事例では、夫の出身地である大分県への移住なども視野に入れている。また、佐野さんの姉2人も兄とは対照的にUターンの意志がない。

この二人の事例からは、1980年代の日本の典型的な女性のライフコースがわかる。学卒後、就労を機に離家し、20代前半で生殖家族を形成すると、配偶者の側の家族関係を中心に人生を組み立てるといえるものである。そして、女性は結婚すると専業主婦となり、家事育児を分担するという性別役割分業がモデルとして機能した時期でもある。このモデルは、この頃、首都圏において機能していたかもしれないが、佐野さんの言葉にあるとおり、第一次産業が盛んな北通では、家族総出で働くことが一般的であっただろう。このような環境で育った佐野さんと塩谷さんは両方とも、子育てが一段落した時点で再就職し、働き続けている。日本の女性労働の特徴であるM字型就労の典型的な事例であり、再就職が非典型雇用であることも特徴として現れている。この時代の既婚女性が、短い期間で転職をおこなう、もしくは再雇用の試験を毎年受けるといった状況を余儀なくされていることは、移動と直接関係がないこととはいえ、指摘しておかなければならないだろう。

### 3-4-2. 帰る予定と複雑な思い

佐野さんと塩谷さんの兄たちの事例からもわかるとおり、男性は地元でUターンする可能性を現実的に捉えているようである。次に、男性の事例を紹介していこう。まず、同郷会会員の柴田靖

一さんと島田始さん、そして、この同郷会の「特別会員」だという大谷三郎さんである。

### ①安定した暮らしがしたい

柴田靖一さんは、国家公務員3種試験に合格し、1983年に高校卒業後、S国税局研修所に行く。1984年に東京国税局に出向し、東京管内の4つの税務署と国税局調査部と国税局課税部に勤務する。2001年に金融庁に出向し、2003年に国税局課税部に戻る。2009年に大阪国税局に勤務し、2011年に国税局課税部に戻る。その後、2013年まで国税局調査部に勤務し、現在東京管内の税務署勤務である。

### 【事例17】直接誰も言わないけど、そういうもんだ

高校の時には、進路について何も特別な考えとかはなかった。家の手伝いはしていたが、漁師をやるつもりはなかった。特別に何かやりたいというものはなく、単に安定したものをというつもりだった。漁師で食えると思っていなかった。40年前でも専門でやれる人はほほいかなかった。父も通年で出稼ぎしており、家にはいなかった。高校生くらいのときに、父親は出稼ぎはやめて、地元の土建屋に行きながら漁師をしていた。出稼ぎをするくらいなら、ちゃんとした雇用でつとめたかった。公務員を希望したのは、知らない中小企業よりは「試験に受かるなら、そっちがいいかな」という程度の気持ちだった。自信があったわけではなかったが、落ちるとも思っていなかった。(人生の) 次のステップに行く不安があるくらいだった。両親は、公務員だということで、「息子の近くにいられる」と思っていたのではないかと思うが、家を離れる時には何も言わなかった。この頃は、子どもの面倒をみるのは、高校まで子どもを外に出すのは当たり前だという意識がふつうにあったように思う。記憶の中では、まだ道が舗装道路になっていなかったような時代だ。

S国税局研修所には、60人程度の採用があり、そのうち、3割は東京に行かされることを研修所卒業のころに教官に教えられた。国税局に入ると、夜学に通って、大学卒業資格を取ることができると、大学に行きたいなら、東京のほうが便利だということもある。その意味で東京は資格取得が容易であるというのもあった。同期18人で東京に出てきて、仲間はほぼみんな夜学に行ったが、自分では行かなかった。最初の配属が小田原だったので、「大学が遠い」ということが理由だった。この頃は寮に住んでいた。いい時代(バブル期)だったので、仕事のプライベートも楽しかった。大間高校の友だちや同窓会のメンバーとも、毎週会って飲んでいた。ただ、同窓会の東京支部には行っていなかった。現在は、塩谷さんと佐野さんから、「人が集まらないから来てね」と誘われ、参加している。

2009年に大阪に異動するときは、久々にちょっと不安だったという。転勤は通常自分で決めることができない。ただ、大阪でも人に恵まれていて仕事も生活も楽しかった。国税局の定年である60歳まで勤めたら、地元に戻ろうと思っている。長男だから帰るもんだと思っている。現在は、地元で両親が住んでいる。両親は漁師であり、コンブを採っているが、たくさんはやっていない。

税理士の資格はとったが、地元に戻って、何をするかは決めていない。姉は、青森市内で結婚して主婦をしているし、妹は埼玉で結婚して主婦をしている。直接誰も言わないけど、そういうもんだ（自分が地元に戻ることは当然）と思っている。妻は、地元出身で大間高校の同級生で、「どっちがいい？」と聞くと「東京の方がいい」とはっきり言うが、親の面倒をみることも含めて、帰ることは承知している。

## ②家族関係が決める

島田始さんは、【事例 13】の島田一人さんの兄で、1983 年度に高校を卒業したあと、東京の薬の専門学校に進学する。2 年間、専門学校に通った後、千葉県の薬局に勤め、1987 年に結婚して地元に戻ってくるが、4 年間、地元で生活したのち、千葉県に戻る。島田さんの兄が、中学校卒業とともに青森市の高校に進学、その後、東京の大学に進学したため、家業を島田さんが継ぐのだと思っていたし、親からもそう言われてきた。近隣の大人からも島田さんが戻ってくるのだ、と言われていた。自分自身も地元貢献をしたいし、地元の人間関係はすべて家族みたいにして育ててきているので数年東京にいたら地元に戻るつもりであった。進路選択の際、地元には薬屋がないことを考えて、一般薬を家業の店で売るために薬の専門学校を選択したという。東京には親戚も多く、東京に出るといふことには安心感があった。一度 U ターンしたが、妻の希望で千葉県に戻り、現在も千葉県で働いている。

## 【事例 18】自分が継ぐもんだと思っていたけれど

専門学校卒業後、実務を経験するために、千葉の薬局で働き、結婚して地元で U ターンした。しかし、関東圏出身の妻が地元の生活習慣になじめなかったため、とりあえず、関東に戻ったところ、その 1 年後に北海道で働いていた弟（一人さん）が地元に戻り、北通の人と結婚して家業を継いでくれた。

千葉に戻った際に、初職で勤めた薬局の社長が「店舗を拡大するから手伝ってほしい」と誘ってくれたので、再度、同じ薬局に戻った。この会社に約 30 年間勤めたことになる。1985 年に就職したときには、7 店舗しかなかったが、現在では 70 店舗あまりになっている。新しい事業を立ちあげるときには、まず、自分で企画して動いて、軌道にのってくと他の社員さんに仕事を受け渡すという形で業務を拡大してきた。

しかし、会社の方針が転換し、「薬剤師に役職をつける」という方向になると決まったので、昨年、社長に辞意を伝えた。ところが、社長から「これから、さらに組織変革をするので、手伝ってくれ。ちゃんとポジションは考えてある」と引き留められ、まだ勤めている。自分としては、社長からみえる会社と現場からみえる会社が違うのではないか、と思っている。長く勤めてきたため、会社のことは何でもわかる。さまざまな事業を立ちあげて、成功してきたため仕事にも自信もある。しかし、薬屋である以上、薬剤師の力が強い。「薬剤師は薬剤師しか尊敬しないから」と考え

ている。そのため、現場では「便利屋のように扱われる」と感じており、「それがちょっと」と思う。

そもそも、「50歳までは、わき目もふらず仕事をしよう」と決めてがんばってきた。再就職して44歳までは、365日働いており、帰宅が2時頃になることもざらであった。同窓会にも参加できるようになったのは、44歳からだ。ちょうど今、人生を考える時期にあたっているため、思案中だ。会社に対しては感謝しているし、恨みがあるわけではないので、今の会社と取引ができるような仕事がしたいと思っている。起業する仕事のノウハウはある、しかし社長のことは嫌いではないし、引き留められているので、どうしようかと思案している最中である。

同窓会で絶対に仕事の話はしない。地元に戻りたいという気持ちがあるが、家族のことを考えると千葉にいるほかないとも思っている。どうなるか、仕事についても考えどきのため、将来は予想がつかない。

この男性の卒業生2人は、どちらも帰るつもりであった。また鳥田さんの弟は、鳥田さんが家業継承を断念した後に継承している。柴田さんの妻が地元出身の大間高校卒業生であるのに対して、鳥田さんの妻は関東圏出身という違いがあった。鳥田さんの弟の妻も地元出身の大間高校卒業生である。生活場所の決定は、生殖家族を形成している場合、家族の意向も大きく、個人の意志で決めることはできない。Uターンを決める要因が家族であるならば、Uターンできない理由も家族だといえる。

### ③将来をきょうだいで話すことはない

大谷三郎さんは独身であり、柴田さん、鳥田さんとは家族状況が異なる。年齢は49歳と鳥田さんと柴田さんよりも1歳若く、高校時代は柴田さんのラグビー部の後輩にあたる。1984年度に高校卒業後、東京の紙の小売業に就職する。高校の求人票で見つけて、就職を決めた。大谷さんは、高校の時から、「東京に行きたい」と思っていた。両親ともに地元出身で、父親はコンブ漁と出稼ぎをしていた。中学校2年生の時に父親が脳卒中で倒れ、その後2013年に亡くなった。現在は母親が一人で地元に残っている。姉（53歳）はむつ市で小学校教員をしており、弟は東京で紙の加工業をおこなっている。大谷さんも30年以上にわたって、紙の小売業をおこなっている。現在は40人の部下を束ねる所長で、主な業務は紙の保管と配送である。

### 【事例19】母親が心配なので、北通に帰るかもしれない

父親が2年前に亡くなるまでは、ほとんど地元に戻ることはなかった。面倒くさくて帰れなかった。今年は、母親が心配で3回も帰った。さらに、シルバーウィークにも帰る予定にしている。家のことは詳しくは考えていないし、きょうだいで話し合うこともない。ただ、弟とは、こちらから「仕事が減ってくるなら地元に戻ったら？」とはいうことがある。弟もまだ仕事があるので、「今は帰れない」と言っている。ときどき、もしかしたら自分が帰るのかもしれないと思うこともある。

姉のことはよくわからない。彼女は、自分が高校卒業するときには、普通の会社で働いていたような気がするが、いつのまにか、学校の先生になっていた。その経緯も聞いたことがない。きょうだいは、みんな独身なので、帰ろうと思ったら、身軽に帰れるのではないかと思うけれど、母親が心配なので、自分が帰ることも最近は考えるようになった。

小学校から高校まで同じ学校に行った同級生と飲むことがあり、その友人から「田舎の近所づきあいができない」という話題が時々出る。その気持ちは大谷さんもよくわかるという。この近所づきあいがネックとなって、Uターンが無理なのではないか、と感じる。この友人ともそれをネタによく話している。「もう、だれが親戚でどんな関係なのか、わからない」から、このネットワークに入っていけないんじゃないかという気がする。そのいっぽうで、現在、母親が一人で暮らせる理由は、地元の地域の「近所づきあい」があるからだと思う。家にはいつも近所の人が遊びに来ており、田舎の近所づきあいというのは、家の中に近所の人がいつもいることだ。そもそも、自分の友だちがどこにいるかもわかっていないのに、帰って近所づきあいができるかどうか心配することもある。ただ、来年8月に高校の同級生と集まろうという話がでてくる。それにしても、地元でだれが幹事をしているのかわからない。ラグビー部の顧問であった先生には会いに行きたいと思っている。

今は、所長をしていて、仕事のことを中心に生活がまわっており、考えることも仕事のことが大半である。現在、5000トンの紙を倉庫に置いているが、さらに2000トン置く計画をたてている。この置き方を考えている。また、一番若い部下で38歳、一番上が62歳のため、まとめていくのに苦勞している。社長は飲み会が好きで、コミュニケーションを円滑にすることをいつも考えていて、それも自分が気を配らなければならない。会社の定年は60歳だが、定年までいるかどうかよくわからない。ただ、地元に戻るなら、今のサラリーを期待はしていないし、そんな仕事もないだろうと思っている。将来、地元でやりたいことがあるかどうかよくわからない。ただ、自宅に近所の人がしょっちゅう来るのは慣れないのではないかと、と思っている。

東京に出てきた頃、高校の同級生で友だちが佐野さんと塩谷さんの住んでいるアパートに連れて行ってくれた。それから、毎週のようにそのアパートで飲んでいた。それで仲良くなった。このようにつきあいは彼らの出身集落の特徴だと考えており、自分の地元集落の友だちたちとはこのようなつながりはないと思っている。

大谷さんの事例は、特段変わった事例ではないだろう。親が高齢になったときに、Uターンをするという移動は、北通でなくともありうる1つのパターンである。しかし、「近所づきあい」という言葉に込められた共同体の緊密な人間関係は、北通に特徴的なものかもしれない。これまで、筆者が北通で調査のために、インフォマントの自宅を訪問している際、近所の人が自宅にふらっとやってくるということが頻繁にみられた。もしくは、近所の人たちや家族が団欒する中で、筆者がインタビューをする、ということも頻繁にあった。「お茶っこやるか」「菓子やるか」「酒やるか」と突然訪問してくる近所の人たちに対して、気遣い、おしゃべりをひとしきりすることが日常的にある。

このような生活を送ってきた北通出身者たちも、都市では、公私の分離がはっきりした生活時間を生きている。北通では、自宅にいても、家族のみの私的な時間が確保されるわけではない。佐野さんが「地元の間人はよく働く」と評したように、朝から晩まで職住近接して働き、家の中では、家族ではない誰かが頻繁にお茶を飲んでいるという状況である。家族のみの時間は、睡眠の時だけであるともいえる。実際に、筆者と仲の良い北通在住の夫婦は、「ときどき、夜、寝ていなくても電気をすべて消しておく」ようにすることがあるという。電気がついていれば、誰彼となく訪ねてくるため、私的な時間を維持するためには、電気を消すことが必要なのだろう。この生活習慣が、都市生活の長くなった卒業生たちにとっては、敷居の高い習慣として理解されるのだろう。

これらの事例からは、男性のUターン意識の存在と、既婚女性の夫側家族中心の意識が垣間見える。つまり、流出やUターンには、ジェンダートラックの規定力が強く効いていると結論できそうである。また、既婚男性のUターンに関わる実際的な決断には、妻の出身地や意識が影響を及ぼしていることがわかる。

#### 4. 議論と課題

本稿では、条件不利地普通科高校を1980年代に卒業し、その後キャリアを積み重ねてきた方がたの地域間移動と地元定着の決定プロセスを、インタビュー資料をもとに把握しようとした。資料的な制約のために現時点でかれらの考慮事項の背後にある生活や家族関係、そして家郷意識のありかたを考え合わせたいまでの議論を尽くすことはできないが、ひとまずここまでをまとめて指摘できる点を整理しておこう。

移動パターンや移動に関する意識について包括的に言えることは、まず、地元定着、他出、Uターンなど移動に関わる意思決定には、必ずしも経済条件格差による不利地から有利地への移動という要因のみが強いはたらくとはいえないという点だ（Uターンや地元定着の事例にはそれが明らかである）。次に、移動のタイミングに関して、進学や就職、転職、結婚、親の病気・死など、典型的なライフイベントと直結するものばかりではないという点も、確認しておいてよい。これら経済的要因とライフイベントのふたつは、移動を決定する要因として説明されてきた代表的なものだ。

また、漁業という伝統的生業の存在が、インフォマントらの移動の語りの通奏低音のようにしてある点にも注意したい。3-2. でみたように、漁業についてのかれらの思いは、アンビバレントなものだ。漁業について強調されるのは収入が不安定だということであり、専業で経済的に一家の家計を支えていくのはきわめて難しいと言われ、子どもたちにも漁業をやってほしいと積極的に思う親はいないようだ。しかし同時に、休日などにおこなう副業として、あるいは退職後の生業としては都合がよい（「暮らすのには困らない」と多くの男性は言う。もちろん漁業がそのまま地元定着やUターンの誘因になっているとまでは言いがたいが、地元において近海漁をしていれば食い詰めることはないというある種の安心感があることはたしかなようだ。

こうした状況のもとで、1980年代の卒業生たちの移動の意思決定やパターンを方向付ける要件

表 事例と地元定着についての考慮事項

移動パターン	現職	年齢	性別	地元定着についての考慮事項 (issue)	事例番号	事例見出し	移動軌跡	
地元定着	漁師	55	男	長男、副業としてのウニ・アワビ漁	事例1	漁との二足草鞋でやってきた	高卒→地元就職(大間)→退職後漁師	
	漁協	53	男	親の介護、きょうだいがいない、地元で結婚・家新築	事例2	ほんとうは出なかった	高卒→地元就職(漁協)	
	公務員	52	男	年上のきょうだいは地元を出た、役場に受かった	事例3	親に役場をすすめられ	高卒→地元就職(役場)	
		54	男	祖母の忠告、役場に受かった	事例4	親にあまり負担かけられるな	高卒→地元就職(役場)	
		43	男	オジの忠告、役場に受かった	事例5	地元に残る途	高卒→地元就職(役場)	
Uターン	公務員	47	男	長男、消防に受かった	事例6	いちど東京に出ておこう	高卒→就職(神奈川)→Uターン(消防)	
		43	男	消防に受かった、親の電話	事例7	ずっと東京にいるイメージはなかった	高卒→職訓(青森市)→就職(東京)→Uターン(消防)	
		43	男	長男、追加募集で役場に受かった、親の電話	事例8	親の無言の導き	高卒→就職(埼玉、3ヶ月)→Uターン(役場)→結婚後むつ在住	
	非常勤など	46	女	地元の職、誰が家に残るか	事例9	33歳厄年、気づいたらみんないる	高卒→通学社員(東京)→帰郷(1年間)→就職(東京)→Uターン(1年間)→就職(佐井)→就職(役場、臨時雇)	
		49	女	地元の職	事例10	教師になるまでの道のり	高卒→短大(東京)→Uターン→就職(大間)→就職(北通各地で非常勤、その後大間)→結婚	
	公務員、漁師	64	男	長男、配偶者が親の介護の「犠牲」	事例11	当時は例外的な大卒Uターン	高卒(青森)→大学(茨城)→?→Uターン(役場)	
		62	男	誰が親のメンドウみるか、関東出身の配偶者とのUターン	事例12	アニ出ている家は、けっこうある	中卒→北洋漁船→就職(埼玉)→Uターン(結婚、漁師)	
	自営業	47	男	誰が家業を継ぐか、アニたち(長男・次男)が家を出た	事例13	極めたいことに打ち込んだあとに	高卒→大学(埼玉)→Uターン(結婚)	
		56	男	他出先で地元出身者と結婚、地元で開業	事例14	夢は老後の漁師	高卒→専門学校(仙台)→就職(埼玉、結婚)→Uターン(開業)	
	他出(関東)	会社員	51	女	年上のきょうだいが関東に出ていた、兄夫婦が両親と実家すまい	事例15	出るのが当たり前だった	高卒→就職(東京)→以後3社を転職し、結婚→専業主婦→以後結婚相手の家業を含む5社を転職
		公務員(非常勤)	51	女	一人娘、兄夫婦が両親と実家すまい	事例16	将来は夫との関係でどこに行くか決まる	高卒→就職(東京)→一時帰郷(2ヶ月)→再就職(東京)→結婚、家業手伝い→専門学校→専業主婦→社会福祉法人→市役所
		公務員	50	男	親のメンドウみる、地元の職	事例17	直接誰も言わないけど、そういうもんだ	高卒→就職(東京、税務署)
		会社員	50	男	誰が家業を継ぐか、関東出身の配偶者とのUターン	事例18	自分が継ぐもんだと思っていただけ	高卒→専門学校(千葉)→就職(千葉)、結婚→Uターン(家業)→再就職(千葉)
			49	男	将来をきょうだいで話すことはない、誰が親のメンドウみるか	事例19	母親が心配なので、北通に帰るかもしれない	高卒→就職(東京)→(退職後のUターン思案中)

はいかなるものだったのだろうか。これを、本稿では通常よく言われる経済的要因やライフコース上のイベントのみによって説明づけるのではなく、「要因」と言えるほどの客観的説明力があるかどうかはわからないが、移動を説明するさいに当人らが挙げた「考慮事項 (issue)」に注意を向けてみてきたのだった。表は、本稿3章で紹介されたインタビュー事例の一覧である。移動パターン(地元定着、Uターン、他出)別に、それぞれの事例で語られた地元や実家についての考慮事項を記してある。全19のインタビュー事例から抽出できることを以下に列挙する。

(1) 条件不利地に残って生活をするという選択(地元定着)には、就職先と配偶者の選択範囲に限定がかかる。高卒地元就職の場合、両親を継いで漁師になるということは少なく、積極的に選択されるのは公務員か漁協、あるいは数少ない地元企業である。地元では都市同様の職種への就職は望めないで、高卒者の多くは県外に他出しようとする。また、結婚相手は多くの場合北通出身者であった。長男でなくともきょうだいのなかでひとり家に残っている場合は多いこと、また親や親のきょうだい、祖母などに誘導されて地元に残る選択をした場合が多いことがわかった。これは(4)にも関連する。

(2) Uターンには、ジェンダートラックがはたらく。他出先での配偶者選択で意識的に同郷者を選ばなかった場合には、Uターンに障壁が生じる。結婚後の居住地は夫方優先の選択傾向を持つため、北通出身の女性で配偶者が他出先(例えば関東)で知り合った北通以外の出身者の場合に、Uターンは困難となる。それと比べれば、北通出身の男性の場合、配偶者の出身地が北通ではない場合にもUターンの可能性は多少ある。しかし、妻と地元(実家)での結婚生活との軋轢をどのように解決していくかということや、自身の職をどう確保するかという問題が残るので容易にUターンを決断できない。

(3) Uターンを若いときにおこなうのか、定年後など歳をとってからおこなうのか、というタイミングがどのように決められるのか。これは微妙な問題であり、まず他出先で満足のいく職に就けているかどうかに関係する。しかしそれだけではなく、もともとずっと他出先で過ごすイメージがあるかどうか、それと関連して結婚を地元の相手とするか他出先の相手とするか、という考慮事項が重要視され、このタイミングと地元で公務員などの職が見つかるタイミングとが一致することによって若い時期のUターンは成立していたようだ。歳をとってからのUターンは、退職が契機として考えられるが、(2)でも述べたように配偶者が地元での生活に馴染めるかどうか(より端的には地元の北通出身者かどうか)が大きな決め手となる。

(4) 以前には長男の家督相続(カマドワタシ)が現在よりも強く意識されていたようだが、現在ではそれほど強く意識はされておらず、子どものうち誰かが「家を継ぐ」、「親のメンドウみる」ことをすればよい。きょうだい順位や、場合によっては息子に限らず娘でも家に残ればよいと考えられることもある。もちろん、長男であることがまったく意識されないわけではないが、長男が地元を離れて他出することはまったく珍しくないということがこれまでの調査でわかっている。した

がって長男が他出しなければ長男が家に残るのではないかと期待されるが、長男が他出した場合は、誰が家に残る（家を継ぐ）のかが焦点化される。しかしこれについてきょうだい間で直接話し合われることはなく、状況を見まもり、お互いの動きを見まもりながら水面下での沈黙交渉が続くことになるようだ。

1974年の大間高校開校後に、若者たちのローカル・トラックに顕著な変化はみられたらろうか？この点について、現時点では2-2.で述べた「1960年代までの『中卒から県外就職、男子は遠洋漁業か都市部非熟練工、女子は紡績』というトラックは明らかなメイントラックではなくなった」というものを越える知見はない。18歳人口が減少した現在では、本稿の調査対象となった1980年代卒業の世代の時点ではごく少数だった大間高校からの大学進学もかつてよりも増加している。この先の1990年代、2000年代の卒業生の追跡調査をおこなうことで、長期的な動向も明らかになっていくだろう。

地域社会の人口維持や、人口の還流に関わる議論においてはこれまで就労という契機に着目した労働力移動の問題として捉えるのがもっぱらだった。本稿は、ある条件不利地の高卒者の地域間移動について、その背後にある決定プロセスの一端を明らかにしたに過ぎない。しかしこの決定プロセスと関連する考慮事項の詳細な研究は、これからの地域社会・条件不利地の若年世代の定着人口を更新していく方途をさぐることにもつながりうる。

## 参考文献

- 阿部淳吉・田中康久・石郷岡泰・大橋英寿 [1967]「下北半島における青年期の社会化過程に関する研究」、九学会連合下北調査委員会編『下北—自然・文化・社会』pp.490-542
- 石黒格・李永俊・杉浦裕晃・山口恵子 [2012]『「東京」に出る若者たち—仕事・社会関係・地域間格差』、ミネルヴァ書房
- 石田浩・村尾祐美子 [2000]「女子中卒労働市場の制度化」、荻谷剛彦・菅山真次・石田浩編『学校・職安と労働市場—戦後新規学卒市場の制度化過程』、東京大学出版会、pp.155-192
- 大間町史編纂委員会編 [2006]『大間町史』、大間町
- 吉川徹 [2001]『学歴社会のローカル・トラック—地方からの大学進学』、世界思想社
- 工藤睦男編 [2006→2009]『風間浦村史（補正版）』、風間浦村役場
- 清水昌人 [2001]「近年の人口移動理由」『人口問題研究』第57巻第1号、国立社会保障人口問題研究所
- 社会行動コース社会調査実習 [2012]『漁師にならない若者たち—大間高校卒業生の進路調査に関するインタビュー調査より』、弘前大学人文学部現代社会課程
- 総務省ホームページ「条件不利地域の地域振興」（2015年11月23日アクセス）  
URL：[http://www.soumu.go.jp/main\\_sosiki/jichi\\_gyousei/c-gyousei/tiiki.html](http://www.soumu.go.jp/main_sosiki/jichi_gyousei/c-gyousei/tiiki.html)
- 総務省ホームページ「平成22年国勢調査」（2015年11月29日アクセス）  
URL：<http://www.stat.go.jp/data/kokusei/2010/>
- 竹内利美編 [1968]『下北の村落社会—産業構造と部落体制』、未来社
- 林研三 [2013]『下北半島の法社会学—〈個と共同性〉の村落構造』、法律文化社

- 林拓也 [2002]「地域間移動と地位達成」原純輔編『流動化と社会格差』ミネルヴァ書房
- フリック、ウヴェ [1995] (小田博志監訳 [2002])『質的研究入門—「人間の科学」のための方法論』、春秋社
- 細江達郎編 [1985]『下北半島出身者の職業的社会的社会化過程についての再追跡調査研究(Ⅱ)—フィールドノートと  
レースレポート』、トヨタ財団研究助成報告書
- 山口恵子 [2012]「大都市に就職した工業高校卒業生の地元意識」、石黒格・李永俊・杉浦裕晃・山口恵子、上掲  
書、pp.195-227